ハ　イ　ト　ク

葵一樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ハイトク

【Ｎコード】
Ｎ９９１８Ｎ

【作者名】
葵一樹

【あらすじ】
真夜中の砂浜。
波の音とアルコールで、あたしの脳は溶けていく。

キス

口をつけた紙コップの中身が辛い。
でもあたしはそれを一気に飲み干した。
舌先を刺激するオレンジジュースの酸味、喉の奥から鼻に抜ける濃い焼酎の匂い。
喉と胃がかあっと熱くなって、あたしはちょっとむせて紙コップを手放した。

「もうギブかよ」

こつんとおでこをつつかれる。
空に浮かぶ半月と星、それと遠くのショッピングモールの屋上の光しか見えない防波堤の上。
暗さになれた目で僅かな明かりを頼りに見つけた顔は思いのほか近く、あたしを見下ろして機嫌よく笑っていた。

「まだまだ。あんたこそさっきからペース落ちてんじゃないの？」

「お前の酒より俺のが濃いぞ？」

「そんなの目分量じゃわかんないじゃん」

「じゃあ次は作った酒交換して飲もうぜ」

「いいよ」

肩をぶつけ合って二人でくすくす笑いながら、砂浜に敷いたレジャーシートの上で焼酎とオレンジジュースの瓶を探る。

すぐ近くでいびきが聞こえた。。
砂まみれの広いレジャーシートの上で、黒い足を投げ出して寝ている人が一人、二人。
彼らが寝てしまって、もう何時間経ったんだろう。

あたしは手近に転がる紙コップに勢い良く焼酎を注いだ。
どのくらい入っているかなんて知らない。
そしてオレンジジュースの瓶を傾け、ちょろっとコップに垂らす。

「できたー」

コップをお互いに交換し、また二人で防波堤に座った。
月明かりを反射する白い紙コップを、乾杯のつもりでそっとぶつける。
コップと一緒に二人のおでこもこつんとぶつけ合った。
酒臭い吐息と、鼻の頭に浮かんだ汗を共有して目を閉じる。

一口含んだ。
熱い。
体中に充満したアルコールが、閉じた目の中でぐるぐるとあたしをかき混ぜる。
あたしは目を閉じたまま、オレンジジュース風味の焼酎を喉の奥に流し込んだ。

「どう？」

「ジュース、ちょっとだけでしょこれ」

「これもな。ジュース入ってんのか？」

「さあ……ね？」

海風に煽られて冷えたむき出しの二の腕に、隣に座る彼の体温が伝わる。
あたしは引き寄せられるように彼の肩へ頭を乗せた。
彼もそれを拒まない。
いつものことだと思ってるんだろう。

防波堤に打ちつける波の音と、いくつかのいびきが交じりあう音以外は何も音がしない。
月の光を映した海が、白い波しぶきを上げるのを黙って見つめる。

彼の細長い腕があたしの肩を抱いた。
潮風でぺたぺたする肩をそっと撫でられる。
くすぐったい。
あたしは小さく笑いながら頭を起こして彼を見た。

明かりがなくても分かる。
酔っ払って悪戯そうな黒い目がじっとあたしを見つめて、その中にいるあたしも悪企みを思いついた顔をして笑っていた。

目を閉じてつんっと鼻先を当てる。
彼もあたしの鼻に自分の鼻をくっつけた。
またあたしが鼻を当てる。
今度はすぐには離さない。
そっとこするように、鼻で鼻に触れ続ける。

触れた鼻先から漏れる呼気があたしの唇を掠める。
きっとあたしの息も彼の唇をくすぐってる。
くすぐったい？　と聞こうとして、あたしの唇が彼の唇を掠めた。

ちくりとした刺激に目を開けて彼を見たけど、彼も何も言わずにあたしを見ている。
相変わらず顔は近いまま、肩に回された腕は離れない。

あたしはコップから手を離して、彼の腰に腕を這わせた。
波の音が遠くなる。
じっと目を開けたまま、彼の唇があたしの唇に触れた。

初めは軽く、触れるか触れないかとところで引き返した。
二回目はやさしく、でもしっかり触れた。
三回目は激しく、押し当てた唇の隙間から温かくて柔らかいものが滑り込んできた。

下唇の内側をねっとりと舐られ、なすがままに口を開けたあたし。
彼の舌はどんどん奥へと入ってくる。
あたしはそれを前歯で甘噛みしながら、舌を絡ませて受け止めた。
つつき合い、舐め合い、吸い合う。
何がしたいかなんて言わなくても分かった。
目を閉じてあたし達は相手の口の中の感触に酔っていく。

くちゅくちゅと唾液が絡み合う音は打ち付ける波の音に溶けていった。
もう砂浜からのいびきも聞こえない。
唾液にまみれたあたしの下唇に彼は自分の唇を滑らせ、あたしは彼の上唇を吸い上げる。

時折漏れる吐息に目を開けると、彼の熱っぽくなった目があたしを見ていた。
眉間に寄ったしわ、暗がりでも分かるぎらぎらした目。

こんな表情、見たことがない。

当たり前か。

だって、彼はあたしの彼の親友だから。

こうなるなんて予想してなかった。

でも仕方ないよ、皆でバーベキューに行こうって言ったの、あの人だもん。

彼とあたし、仲がいいのは知ってるくせに。

彼の手の平があたしのタンクトップの裾から忍び込む。

躊躇うようにあたしのおなかや脇腹を撫で、そして止まった。

冷えたおなかの皮膚に触れる指は熱く、でもじっとりと汗ばんで、触れた部分から彼の鼓動が聞こえてくるみたい。

「ねえ……」

あたしは強く唇を押し当て、布越しに取った彼の手をそのまま上へと引き上げた。

朝日が昇る頃、あたし達はドアを開け放した車の中で眠ってた。

まぶしくて持ってきた帽子を顔の上に乗せていたけど、息が篭って暑かった。

太陽が高くなっていくのと同じペースで気温も上がってるんだろう。

開け放した車内もどんどん暑くなる。

結局寝苦しくて三時間も眠らないうちにあたしは身体を起こした。

狭い助手席のシートの上で身体を捻ると、おなかの皮がちょっと引きつるように突っ張った。

タンクトップをちょっとめくり、デオドラントシートでそっとふき

取る。
おへその中にもかさかさしたものが入っていたけど、なんとなくそれはそのままにしておいた。

ふうっと息を吐くとまだそれはお酒臭い。
帽子を口元に当てたまま、あたしは運転席側で眠る彼を見る。
薄い唇がしどけなく開き、その周りが白く光っていた。
帽子を握ったあたしの手の平には無数の擦り傷。
指からは彼の匂い。
そしておへその中には――。

匂いを嗅ぎ、その指でジーンズの外から太ももの間をなぞると、あたしの下半身はきゅうっと疼いた。

そういえば何回したんだろう。
最後は良く覚えてない。
ただ波がはじける音と、彼の荒い息遣いが今も耳元でしてるみたい。

砂の照り返しに目を細めて沖を見ると、海と空の境目に白いフェリーがひとつ見えた。

「ん……あっちー……」

車外のレジャーシートで寝ていた一人が起きたみたい。
じりじり照りつける太陽の下でこんな時間まで眠れるなんて、お酒の力ってすごいなと妙に感心する。
ちょっともったいない気もしたけど、あたしは手の平と指先をデオドラントシートで拭いた。

「おはよー」

「おう、お前らだけ車の中か」
「リョウスケ達が先に潰れたんじゃん」
起こせばいいだろ、とリョウスケはぼやいた。
「べったべたするわ砂まみれだわ、俺ちょっと海入ろうかな」
「ついでにシュウも起こして海に放り込んでやってよ」
「それでもカノジョかよ」
「カノジョだから許可すんのよ」
「ひでーカノジョ」
くすくす笑いながら、リョウスケは隣で大の字になっているシュウを揺さぶり起こした。
無精ひげがまばらに生え、酷く疲れた顔をして起き上がるシュウにあたしは車内から手を振ってみる。
拭いたはずの指先からまだほのかに彼の匂いがするみたい。
「おはよ……」
「おはよー」
気だるさからか消え入りそうなシュウの声。
対するあたしの声はいつも以上に普通だった。
車から降り、レジャーシートの上でうなだれるシュウの元へと駆け

寄ると、その背中の砂を払い落としてやる。
でも数回服を叩いたところで、あたしの手は止まった。

照り付けられた砂から、まだ午前中の早い時間だというのに熱気が立ち上っている。
その熱い空気が、あたしの鼻先にシュウの匂いを運んできた。
アルコールと、ジュースと、砂埃と、そして嗅ぎなれた汗の匂い。
それを感じた瞬間、あたしはもう終わったよとシュウの傍から一歩離れた。
まだ彼の匂いの記憶を上書きしたくない、そう思った。

シュウはありがとと呟くと、リョウスケと共に朝の海へと向かって行った。
まだ水温も低いだろうに、シャワー代わりというわけだ。
防波堤から続く階段へ行き、そこでおもむろにトランクス一丁になる。

あたしも誘われたけど、そこはお断り。
水着もないし、海水じゃ余計にぺたぺたしそうだしと言うと、シュウもリョウスケも笑って行ってしまった。

でも本当の理由は別にある。
暗いときは分かりにくかったけど、あたしの胸やおなかや太ももには彼の跡がしっかり刻まれている。
それらを見せるわけにはいかなかったのと、もう一つ。
おへその中の彼を持って帰りたいなんて思ってたから。

あたしが車に戻ると、彼が目を覚ました。
ぼうっとしているのか、目を数回瞬かせて大きく伸びをする。
覗き込んでいるあたしと目が合うと、にやりと笑って身体を起こし

た。

夢じゃなかった。
あたしは共犯者に向かって笑った。

「おはよ」

「おはよ、寝た？」

「暑くてそんなに寝てない」

「あいつらは？」

「海。水浴びするって行っちゃった」

そっか、と笑った彼の顔が近づいた。
掠るように唇を触れ合わせると、すぐ離れて車を降りる。
痩せぎすの身体に沿う、細身のTシャツの袖から伸びる腕には、いくつかの擦り傷が見えた。
でもあれはあたしがつけたのか、それとも砂やコンクリートがつけたのか分からない。

「俺もちょっと潜ってこようかな」

「顔、洗ったほうがいいよ」

あたしの体液にまみれた彼の顔は、太陽の光を反射してちょっと白っぽい。
あっさりとあたしの痕跡を消しに行く彼の背を見送って、あたしはもう一枚デオドラントシートを取り出し首と胸元を拭いた。

帰りの車の中で、彼はいつも通りに丁寧な運転をした。
いつもの通り、助手席に座るリョウスケの良く分からないお笑いネタに華麗なツッコミを入れ、後部座席に座るあたしとシュウはそれに大声で笑った。

あたしのアパートの前でシュウとあたしが降り、部屋へ向かうのもいつものこと。

いつも通りあたしが夕食の支度をして、シュウが洗濯機を回しつつ風呂の支度をする。
いつも通りシュウが先に入浴を済ませ、次にあたしが入る。

お風呂の中で、あたしは丁寧におへそを洗った。
指先でぬめり気のある感触を十分楽しんでから流す。

胸や内股に残っていると思った彼の跡は思ったよりずっと薄くて、これなら電気を消せば分からないだろう。
どうせ夜もいつも通りなんだろうから。

ごはんを食べて、二人が好きなお笑い芸人が出るテレビを見て、じゃあ寝ようかとシュウが言い出すのも、まったくいつも通り。
シュウが電気を消し、二人で狭いベッドに潜り込むのもいつも通り。
横になって数秒後、耳たぶにキスをされるのもいつも通り。
パジャマ代わりのコンビネゾンの裾からシュウの手が滑り込んでくるのも、太ももをなぞられるのも、下着の中でその指を動かされあたしの腰が動き出すのも、いつも通り。

決まったタイミングでシュウの腰があたしの脚を割ってくる。
あたしは決まったポイントで声を上げる。

ただのルーティンワークをこなすあたし達。

いつもと同じ。
何事も変わりない。

ただその夜、あたしは一回もシュウとキスをしなかった。

アメ

あたしが次に彼に会ったのは一週間後。
ゼミのレポートを出しに大学へ行って、学食でぼうっと缶コーヒーを飲んでいたときだった。

天井からはめ込まれた大きなガラスに、まるで何本もの川が流れているみたいに雨水が伝う。
厚手の雲が空を覆い、まだ二時前だというのに学食内は薄暗い。
昼前にアパートを出たときには雨なんか降りそうもない空だったのに、教授のながーい世間話に付き合ってた間にみるみる黒い雲が広がってきて、これだ。
いわゆるゲリラ豪雨とでも言うんだろうか。
酷い雨足だ。
これはたとえ傘があったとしてもしばらく帰れそうもない。
缶コーヒーを片手に、あたしは大きな窓の近くの席で降りしきる大粒の雨を眺めていた。

ごったがえす昼の時間もとうに過ぎ、まだ夏休み中だということもあるのか、広い学食内には数えるほどしか人がいない。
それでもそれぞれに話し相手がいるのか、一人でこうやってコーヒー片手にぼうっとしているのはあたしだけ。
調理のおばちゃんたちも一息ついているみたいで、調理場の方から笑い声が聞こえてきた。
今更だったけど、シュウのバイトが終わってから一緒に提出にしにくればよかったと思った。

そうすればこんな雨に遭遇することもなかっただろうに。

デニムの裾はさっき雨の中校舎から走ったせいで濡れてる。
膝裏から下に、跳ね上げた泥が点々としみになっていた。
まあ、どうせそろそろ洗おうと思っていたところだしいいか、とあたしはまた缶コーヒーに口をつける。
今日着てきた白いチュニックに付かなかっただけ良かった。

と、思っていたら後ろから肩を叩かれた。
それも結構な勢いで。
おかげで傾けた缶から口がはずれ、口に入るはずだったコーヒーがぱたぱたと音を立てて膝にこぼれた。
それも膝だけならまた良かったのに、さっき泥が付かなくて良かったと思ったチュニックの胸元にも茶色いしみが出来ている。

「ちょっと！」

あたしは口の周りに飛び散ったコーヒーを拭いながら振り返った。

「よう」

場合によってはひっぱたいてやる、と思って振り上げたあたしの手はその顔を見た瞬間に握り拳に変わった。

ごつんという鈍い音と一緒に彼の顔が歪む。
胸を押えてしゃがみこむ彼に、あたしは自分のチュニックのしみを指差した。

「買ったばっかりだったのに！」

「っだよまったく。痛えなぁ……」

「あんたがどつくから、コーヒーこぼしちゃったじゃない」

「洗えばいいじゃん」

「コーヒーのしみは取れにくいの！」

ほら、とあたしはチュニックの裾を引っ張って彼にしみを見せ付ける。

はじめはほんの小さなしみだったのに、繊維がコーヒーを吸い上げてどんどんその径が広がっていた。

「うわ、ごめん」

「弁償だ弁償だ」

「バイト代まだなんだって知ってるだろ」

「そんな言い訳通用するか！」

「あー、もう、悪かったって」

「許さん！」

あたしがまた殴る真似をすると、彼は棒のように細い身体を折り曲げて、更には背中をこれでもかというほどに丸めて頭を下げた。

少し長めに整えられた茶色い髪から雨の匂いがする。

あたしはまじまじとその頭を見た。

頭頂部から少し外れたつむじが、ゆるくのの字を書いている。

その奥に見える地肌はほとんど赤みのない、きれいな肌色だった。

よく見れば彼の腕も、首も、男の人にしては色白できれいな肌だと思う。

あたしは反射的に自分の腕を見る。
決して色白とはいえない、この間の海でちょっと日焼けした肌色がそこにあった。
ちょっと悔しくなって、あたしは頭を下げている彼のわき腹を握るようにくすぐった。
人気の少ない学食に、彼の大きな笑い声が響く。

やめろやめろと笑いながら手を振り払おうとする彼と、それでもやめないで食い下がるあたし。
彼とじゃれあうのは別段めずらしいことではないけれど、二人のテンションはやけに高かった。
少なくともあたしは自分でも分かるくらい大袈裟にはしゃいでいる。

「どうしよ、それ。洗っても落ちない？」

ひとしきり笑って、あたしの怒りがそれほどでもないことが分かったんだろう。
彼があたしのチュニックを指差した。

「んー、すぐ食器用洗剤で洗えば落ちるかも」

「じゃあ洗いに帰ろう」

「でもこんな雨だし、あたし傘ないし……」

そこまで言って、あたしはちょっと言葉尻を濁した。
こう言えば彼がどう言ってくれるかなんて、計算しなくても分かっ

てる。
夏休み前の彼だって、きっと同じことを言ってくれるだろう。
「そんなの俺が送ればいいだろ。どうせ車だし、乗ってけよ」
やっぱり。
笑いながら彼はあたしの予想通りの言葉をくれる。
けど見上げた彼の目の光は、いつもとはちょっと違って見えた。
彼の目がそんな風に見えたのは、もちろんあたしの中に原因があることは分かってた。
コーヒーのしみだって、すぐ洗わなきゃ落ちないかもしれないけど、今すぐじゃなくても落ちるかもしれない。
お互いに言葉には出さないまま、あたし達は肩を並べて学食を後にする。

土砂降りの中あたし達はせーので通用口から駆け出した。
駐車場の隅に留めてある水色の軽自動車まで、百メートル近くを一気に走る。
ばちゃばちゃと雨水を跳ね上げたせいで、頭や肩だけでなく腿の裏や背中まで盛大に濡れた。
小奇麗な車内に泥を持ち込むのは気が引けるけど、そんなことを言っている余裕も無いし彼も濡れたそのままの身体で車内に飛び込む。
「これ、送ってもらっても歩いても、濡れ方変わんないんじゃない？」
荒い息を整えながら、あたしは濡れた頭や肩を拭くためにバッグからタオルを取り出した。

「じゃあ歩いて帰れよ」

「やだよ、もう乗ったもん」

べえっと舌を出し、あたしは腕についた水滴を拭く。
額から流れ落ちる汗だか雨水だか分からないしずくに、ちょっとメイクも流されているに違いない。
タオルをフェイスラインに押し当て大きく深呼吸をした。

締め切っていた車内は暑かった。
そこに入ったあたし達二人の呼吸と濡れた服のせいで、一気に湿度も上がったみたい。
腋や胸元には汗をかきそうな程じっとりと蒸し暑い空間で、濡れた服が貼り付いた肩と膝の冷たさがやけにしみた。

「服」

早くエンジンをかけてエアコンをつけてくれないかなと思っていると、激しい雨音に隠れるように突然彼が呟いた。
キーを挿す気配はない。
代わりに運転席のシートをスライドさせる音がする。

「ん？」

あたしは聞こえているくせに良く聞こえなかったフリをした。
掠れた彼の声にどきどきしているのがバレないように、わざと大袈裟に首をかしげて振り返る。
すると彼は濡れた白いチュニック越しに見える下着のラインを指差しながら、その指であたしの唇をなぞった。
じっと目を見てくる彼の黒い瞳の中にいるのは、期待した表情を隠

さないあたしがいる。
あたしの期待が伝わったのか、それともはじめからそのつもりだったのか、彼の顔が近づいてきた。

「濡れてるとエロいね」

耳のすぐ近くで彼が囁くと、その微かな振動であたしの背筋にぴりぴりと電流が走る。
彼の唇があたしの耳たぶに触れ、小さなピアスをかじった。
かりっという硬質な音と、ふわりと柔らかく熱い唇の感触のギャップ。
急に腰の落ち着きが悪くなる。

あたし達はお互いに共犯者だと知っていた。
だからこそ、お互いに言葉には何も出さない。
でも、だからこそお互いの欲しいものが何か、手に取るように分かる。

あたしは運転席側に身を乗り出した。
少し長さのある薄い耳たぶに唇を近づけ、そうっと舌を這わせる。
小さい頃に舐めた雨の味の中に、ちょっぴり塩味が混ざっていた。
舌先を刺激する彼の味をしっかり記憶する。

身体を離し彼を見ると熱っぽい瞳と目が合った。
それが合図になった。

強く唇を吸われ、身体は助手席のシートに押し付けられる。
大きな手の平が胸に触れると、チュニック越しにあたしのブラを引き下ろした。

軽自動車の薄い天井を叩き続ける激しい雨音はまだ消えない。
窓ガラスはあたし達の熱気で白くくもり、外の様子は何も見えない。
でもこんな土砂降りの中、駐車場の隅まで来る物好きなんているはずも無い。

白いチュニックについたいくつものしみは、繊維の奥の奥までしみこんで大きな斑点となっていた。

ハシ

「今日、どっか行ってた？」

晩御飯の餃子をあたしがテーブルに置くのを待っていたみたいに、テレビに向かってゲームをしていたシュウが顔を上げた。
のどかな田園風景が広がるテレビ画面で、とぼけた顔のウシが草を食む。
ぎくりとした拍子に指先のバランスが崩れ、テーブルと餃子を乗せた皿の底が必要以上に強くぶつかった。
あっつー、とあたしがわざと大袈裟に皿を持っていた指に息を吹きかけているのを見たシュウは、きっと慌てたんだろう。
手に持っていたコントローラーを放り投げて駆け寄ってきた。

「だいじょぶ？」

「ん、皿の底の薄いとこ触ってたみたい」

実際に偶然にもあたしの左人差し指は皿の熱いところに触れていて、うっすらと赤くなっていた。
水で冷やそうか、それとも放っておくか迷うくらいの、ごく軽いやけど。
でもシュウはちょっと待っててと言うと、すぐに冷蔵庫から熱さまし用の冷却シートを取り出してきてくれた。

「あとの支度と晩飯の後片付けは俺がやるから、ちょっとこれ貼っておきな」

そっと貼ってくれたシートはジェルがひんやりと気持ちいい。

肩と膝をじわじわ冷やした雨とは違う、ぴんと一本筋の通った本格的な冷たさにあたしは喉を鳴らして生唾を飲み込んだ

バレているはずが無い。
シュウはずっと中学生の塾でアルバイトをしていたはずだから。
帰ってきてすぐに汚れたチュニックや下着は洗濯機に放り込んだし、念入りにシャワーを浴びて全身のチェックをした。
今日は何故か、彼の名残を消すのがもったいなくなかった。
それは車で送ってもらった別れ際に、シュウが明日もアルバイトで不在だという話をしたからかもしれない。

「今日のおかず、あと味噌汁だけ？」

「ううん、冷蔵庫にサラダ作った。で、何？」

あたしは努めてなんでもないフリをして、シュウに首を傾げて探りをいれた。

「ん？　ああ。今日どっか行ってた？　って聞いたんだった」

「学校。ガスクロのレポート出しそびれてたから」

そしたら教授や助教授に捕まっちゃって大変だったよ、とあたしは笑う。

「シュウはもう出してあるんだよね？」

「もちろん。俺、夏休み始まる前に出したよ」

「なんでそんなに早く書けたの？」

「逆になんでこんなに遅くなるまでほっといたの？」
考察も見せてやったじゃん、とシュウは笑って冷蔵庫に向かう。
あたしの部屋にあるのは一人暮らし用の小さな冷蔵庫。
シンプルだった白い扉を赤く塗り、いくつもスイーツや動物のマグネットをつけた。
そこへ男の人にしては小柄な上半身をつっこむように屈んでいたシュウが、サラダを発掘して起き上がる。
手に持った保存容器の蓋を開けると、ちょっとだけ顔をしかめた。

「またコブサラダ？」

「いいじゃん、アボカドおいしいし。トマトも入れたよ？」

うーん、と表情を曇らせるシュウ。
容器の中に入っているのはアボカド、ゆで卵、ビーンズ、ブロッコリー、茹で鶏、そしてトマト。
シュウが渋い顔をする理由はアボカドとビーンズだ。
サラダなのにねっとりしていたり、豆特有のもくもくした食感が苦手だったりするのは良く知っている。
でも反対にあたしはトマトやブロッコリーの青臭さが大嫌いだった。

餃子のたれも二種類準備してある。
ラー油たっぷりの辛いしょうゆと、酢がたっぷりのすっぱいしょうゆ。
辛いのが大好きなシュウと、酸味が好きなあたし。

そういえば、こんな風にシュウとあたしは合わないことがたくさんある。

朝食べるもの、見たい映画、良く聞く音楽、得意な科目、好きな香り、好きな服のタイプ、飼いたい動物。
目玉焼きやゆで卵に何をかけるかで揉めたこともあったっけ。

ぼんやりと「合わない」事柄を思い浮かべると、ちょっと考えただけでもこれだけ浮かぶ。
あたしはテーブルに乗った晩御飯を眺めながら、そっと唇に指を這わせた。
あれから一週間、あの夜以外は拒まなかったけど自分から積極的にシュウとキスしようとは思わなくたっていた。
触れ合うだけのキスも、粘膜の全てを舐るようなキスも、気持ちいいとは感じない。
これも「合わない」ってことなんだろうか。

「まあいいや、食べよっか」

ほら、とシュウはあたしに茶色いプラスチックのお箸をくれた。
半同棲し始めるときに百円ショップで買った五膳で百円のプラスチックのお箸は、カトラリーケースの中で混ざってしまってどれがどれとセットなのか分からなくなっていた。
今渡されたお箸は二本とも今朝あたしが使っていたものかもしれないけど、片方、または両方ともシュウが使っていたものかもしれない。

いただきますと手を合わせ、シュウがおもむろにごはんを口にかきこんだ。
大きな口を開けた瞬間、上下に開いた前歯をロープで繋ぐように粘り気のある唾液が伸びる。
ごはんと一緒に口の中へと入ったお箸にその唾液が絡んだ。

あたしは自分の持ったお箸を、今更そんなことをしてもどうしようもないことは分かっていたけれど、テーブルの下に隠してシャツの裾で拭いた。
ごしごし、ごしごしと。

最初に口に入れたごはんは僅かに湿布薬の匂いがした。

翌朝になってシュウがアルバイトに出かけてから洗濯機を回したけど、案の定白いチュニックのしみは取れていなかった。
仕方なしに、キッチンの流しにボウルを置いてその中に水を張る。
うちには漂白剤なんていう気の利いたものはなくて、ためしにキッチン用にと学校からパクってきた塩素を薄めてかけてみようと思ってやめた。
夏休み前に実験に使う消毒薬を作ろうとして、ぽちゃりと一滴跳ねた塩素がついた服に穴が開いたことを思い出したのだ。

今日の服は海に着ていったタンクトップ。
着替えてやればいいんだろうけど、それも面倒。
それにこのタンクトップとチュニックのしみが一つの口実になると思っているあたり、あたしも相当夏の熱気にうかされている。
今日はどうするんだろうと彼の薄い唇と細長く整えられた爪を思い出すと、テーブルに置きっぱなしの携帯が鳴り出した。

誰もいない部屋に流れるメロディは、彼専用に設定してある女性アイドルユニットの曲。
メールだろうと思っていたら、ワンコーラス分メロディが流れ続けても止まらない。
電話だ。
あたしはキッチンに塩素の瓶を放り出して、慌てて携帯を手に取った。

「もしもし？」

「もしもし？」

通話ボタンを押してあたしが応答すると、ほぼ同時に耳元で彼の声がした。
狙っていたかのようなタイミングに、あたし達は電話越しに笑い合った。

「慌てすぎじゃね？」

「そっちこそ、もっと早く電話出ろよ」

「メールだと思ったんだもん」

「メールだとお前、返事すぐ寄越さないだろ？」

「そんなことないよ」

だって待ってた、とは言えずにあたしは言葉を切る。
電話の向こうにいるはずなのに、すぐ耳元で含み笑いをしているみたいな息遣いをもっと聞きたい。

「そうそう、今日さ、シュウから聞いてる？」

突然彼の口からシュウの名前が出て、あたしは一気に現実に引き戻された。
頭から冷水をかぶったみたいにきゅうっと体の芯から冷たくなっていく感覚に、昨夜の冷却シートを思い出す。

そして湿布薬の匂いも。

「何を？」

自分の声まで冷たくなっている。
シュウが彼と連絡を取るのも、彼の口からシュウの名前を聞くことも、当たり前なはずのことだったのにそれがやけにムカついた。
そしてそれをなんでもないことのように話す彼の声が普通すぎて、昨夜一人で動揺していた自分が馬鹿みたいに思えた。

「今夜みんなで飲みに行かないかって。聞いてない？」

「聞いてない」

「もうすぐ夏休み終わりじゃん？　前期テスト前に最後にぱっと騒ごうぜって」

「ふうん」

あたしは携帯を耳に当てたまま、キッチンへ向かった。
放り出したままになっている塩素を勢いよくボウルの中の水に注ぐ。
希釈濃度なんて知らない。
換気扇を回していないキッチンに塩素特有の刺激臭が立ち上る。
どばどばと音をたてて塩素を注ぎきると、その中を混ぜもしないであたしはチュニックを突っ込んだ。

白いコットンの生地に、じわりじわりと水分がしみていく。
コーヒーのしみがある部分も、首の部分も、袖口も、裾も、あっという間にボウルに張った塩素水に浸ってしまった。

ふと見たタンクトップのおなかの部分には、水跳ねの跡がいくつもついている。
跳ねたのは水なのか、それとも高濃度の塩素なのか分からないけどそれすらどうでも良かった。

「おい、聞いてんのか？」

「聞いてるよ。飲むんでしょ、シュウもリョウスケも」

じゃあまた夜ね、とあたしは電話を切った。
足音も荒く脱衣室に向かうと、着ていたタンクトップを脱ぎ捨てる。
下着姿のままベッドへ倒れこみ枕に顔を押し付けた。

カーテンを閉めた薄暗い寝室に、細くあけた窓から入ってくる蝉の声が鬱陶しい。
ベッドからも、枕からも、あたしとシュウの匂いがする。
慣れ親しんだ匂いだったけど、今欲しいのはこれじゃなかった。
ぎゅっと目を閉じて記憶の中の彼の匂いを探す。
でもここにはそんなものあるはずもなくて、あたしは両足をばたばたさせて唸った。

砂の匂い、潮の匂い、アルコールの匂い、ジュースの匂い、雨の匂い。車のシートの匂い、唾液の匂い。
彼の匂いはそのときによって変わった。
そのどれを思い出しても不快感はなく、あたしの中に彼の感触が生々しく蘇る。
こんなに欲しくなってるのに思うようにならない。
それを察してくれない彼に腹が立ち、こんなところで子どもみたいに駄々をこねている自分に腹が立ち、自分の枕に顔を押し付けたまま唸り続ける。

するとまたあのメロディが鳴った。
携帯をなげてしまおうと思ったけど、それはできなかった。
着信を見ればやっぱり彼の名前があって、何の用だったとしてもあたしはそれを拒めない。
いや、かけなおしてくれることを願って切ったはず。
握ったままの携帯電話を開き、通話ボタンを押した。

「急に切るなよ」

ちょっと怒っている声なのに、それでもまた彼の声が聞けたことにあたしの胸は躍る。
鬱陶しいと思っていた蝉の声が遠のいた。
ベッドの上で膝を抱え、立てた膝の下から冷たくなった下着の外側に指をあてがう。
夜、シュウと一緒に彼と会うなんてナマゴロシだ。

「今すぐきてよ」

たまらなくなって、あたしは握り締めた電話に向かってささやいた。

ツメ

外が薄暗くなるまで何度もあたし達は繋がった。
閉め切った室内はすぐに暑くなり、ベッドはあたし達の汗でじっとりと湿り気を帯びていく。
顔や背を流れ落ちる汗に耐え切れず、エアコンのスイッチを入れたのはいつだったかも忘れた。
はじめは躊躇っていた彼の衣服も、既にどこかへ脱ぎ捨てられている。

あたしに触れる彼のタイミングは全てにおいてシュウとは違って、その度にあたしの喉の奥からは自分のものじゃないような声が漏れた。
タイミングのせいだけじゃない。
酔っ払った浜辺や、狭い車内とは違う、ベッドの上で足や腕を絡ませながらするのは、普通のことなのにやけに興奮した。
見慣れた天井、シーツ、壁にかかった洋服、電気のシェード。
室内の全てがあたしを見て、そして黙っている。

細長い爪での一際強い刺激に、あたしは彼の頭に手を伸ばして抱きしめる。
ごわついたシュウの髪の手触りを予想していたあたしの指は、彼の柔らかい猫っ毛に一瞬驚いてそれから力を込めた。
脚を割って入ってくる腰も、シュウの厚みのある体つきとは違って薄くて細い。
流れる汗の匂いも、どこか男臭いシュウとは違って彼のは甘い気がした。
身体全体で感じるシュウとの違いに、自分が一層興奮してくるのをあたしは止められない。

あたしの部屋なのに、あたしは今彼と身体を繋げてる。
深く舌を絡ませていた口を離し、あたしは大きく身体を仰け反らせた。
眉根にシワを寄せた彼の切なげな表情に、あたしの芯がきゅうっと熱くなった。
声とかベッドの音とかが隣の部屋に聞こえているかもなんて、そんな理性はどこにもない。
ベッドが揺れて、あたしの視界も揺れた。

居酒屋の喧騒は嫌いじゃない。
普段は苦手なタバコの匂いも、油っぽい料理の匂いやアルコールの匂いに混ざると、臭いと思わなくなるから不思議だ。
特にここ、あたし達が良く使っている串焼き居酒屋では、炭火に落ちる脂の煙とタバコで視界が曇るくらいが丁度いい。
カウンターの向こうで焼きものをするマスターが、威勢のいい声でオーダーの上がりを告げた。

店の入り口に近い四人掛けのテーブルで、あたし達は運ばれてきた串焼きに思い思いに手を伸ばす。
あたしが取ったのはトリ皮の塩焼き。
ぎとぎとと脂が光り、一口かじっただけで顔中がテカりそうだけどこれがまた旨い。
舌の上で甘い脂を転がしながら、空になった手元のジョッキを持ち上げた。

「おかわり？」

隣に座った目ざといシュウが、あたしの手からジョッキを受け取っ

てくれる。
同じの、とシュウにオーダーを任せて、あたしはまたトリ皮を一口かじった。

それにしても悪趣味な顔合わせ。
なんでもない顔をしてここにいるあたしも相当キてると思うけど、堂々とあたしに電話したよとシュウに告げる彼の神経もどうかしてるんじゃないかと思う。

まあ、それを聞いても「あ、言うの忘れてた」とか言ってるシュウは、実はもうあたしのことに興味なんてないんじゃないかと思ったり。

店員が持ってきた生グレープフルーツサワーを受け取ると、あたしは輪切りにされたグレープフルーツとスクイーザーをシュウに手渡した。
いつものことと思っているのか、シュウは何も言わなくてもそれを絞ってジョッキの中へと注いでくれる。
あたしは注がれた果汁をマドラーでかき混ぜるだけ。
力いっぱい絞られたグレープフルーツは果肉や薄皮もはがれ、それを混ぜたサワーは僅かだけれどほろ苦い。

目の前に座る彼とリョウスケは、さっきから各科目のヤマについて語り合っていた。
既にサークルの先輩からもらっている過去問整理の分担決めだ。
目ぼしい科目、比較的単位の取りやすいというウワサの科目は彼とリョウスケが取り合い、それに時折シュウが名乗りをあげる。
余った科目があたしの担当。
それぞれの得意科目や楽だと思う科目が違うから、この決め方でもそれほど困ることは無い。

万が一あたしの苦手な化学系が余ったとしても、シュウが気を利かせてやってくれるから。

べったりと口内に貼りついたトリの脂をサワーで流すと、今度は豚トロに手を伸ばした。
今日はなんだか脂っぽいものが食べたかった。
トリ皮一本食べただけでも鼻の頭や額に皮脂が噴出していたけど、口の中や舌が脂の味や感触を求めてた。
豚トロの次は豚バラ。
普段なら付け合せのシシトウとかナンコツとかを間に挟むんだけど、今夜は立て続けにお肉を食べる。

あたし以外の三人はまだ過去問の分担が終わらないのか、食べ物にも酒にもほとんど手をつけていない。
リョウスケのジョッキには、最初のビールがまだ半分も残ってた。
出席日数が危ないリョウスケはテスト結果次第では単位保留になる科目もありえるから、ちょっと顔つきがいつもと違う。

今必死になるならせめて学校くらい来れば良かったのに。

なんだか一人蚊帳の外な気分になって、あたしはジョッキの中身を一気に空けた。
豚の脂まみれだった口内が、ほろ苦いグレープフルーツとサワーの炭酸でこざっぱりする。
ことりと音を立ててジョッキを置くけど、今度はシュウも話に夢中で気がつかないみたい。
あたしは低い背もたれに腰を預けて、黄色く煤けた天井を見上げた。

こつんと膝に何か当たる。
そしてあたしが顔を下ろすより先に、むき出しの膝に誰かの手が触

れた。
隣のシュウのものじゃない。
その手にとんとんと膝頭を叩かれ、あたしはシュウが見ている過去問を覗くフリをして身体を起こす。
そうっとテーブルの下へと片手を伸ばすと、あたしの指にそれまで膝を触っていた指が絡んだ。
指の腹で探れば、四角くてごついシュウのものとは違う滑らかな楕円形に整えられた爪の感触が伝わる。

「次、頼む？」

彼があたしの空になったジョッキを片手で指差して、カウンターのマスターに声をかけてくれる。
マスターの奥さんらしき人がテーブルまで駆けてきて、彼がコレと同じのをと頼んでくれている間ずっと、あたし達はテーブルの下で指を絡ませていた。
隣ではシュウとリョウスケが統計学の傾向を話し合っているのに。

新しい生グレープフルーツハイが来ると、今度は彼が絞ってくれた。
丁寧に絞ってくれた果汁は薄皮を含んでいなくて、サワー自体も甘酸っぱい爽やかな味だった。
口の中がすっきりすると、あたしは大皿に乗った最後のトリ皮に手を伸ばす。
すると彼がちょっと待ったと言わんばかりにあたしの手を止めた。

「そのトリ皮、俺も食いたい」

「頼めばいいじゃない」

「一本はいらねーんだよ。ぎとぎとするし」

「そこが旨いと思うんだけど」

「お前こそ何本も食ってたら太るぞ」

「たまにだからいいのっ」

あたし達のやり取りはいたって普通。
いつも通りだから気にもされていないのか、カノジョが他の男と口論になりかけるというのにシュウがこちらを向く気配すらない。
信用されているんだか、それとも本当はどうでもいいのか、良く分からない。
そして、それがありがたいと感じるのか物足りないと思うのか、あたしがどう感じているのかも良く分からない。

「半分ちょーだい」

無邪気な笑顔で彼がトリ皮串を手に取った。
お箸で取り皿に分けるのかと思いきや、そのまま串にかぶりついて半分を一口で食べてしまう。
口から抜き取った串を、ほらと言って寄越した。
上半分のお肉を取られた串を、ちょっと口を尖らせながらあたしは受け取る。
先の尖った串の身にまとわりついているのはトリの脂と、彼の唾液。
あたしは躊躇うことなくその串に口をつける。
弾力のある皮の歯ざわりと楽しみながら、口の中で脂と彼の名残を探す。

分かるわけがないのに。
でも舌の上でトリ皮を転がし、彼と味覚を共有している気になるのも悪くなかった。

「あ、俺ちょっとトイレ」

リョウスケと話し合っていたシュウが、手に持った牛タン串をあたしに向けて腰を浮かせた。

「あと一個だけど、食べていいよ」

そう言ってあたしの取り皿に串を置き、そそくさと店の奥へと姿を消す。
あたしは残された串に目を落とした。
トリ皮や豚肉の串よりずっと太くて長い竹串の、根元に近いところにちょこんと一つだけタンが刺さっている。
ねぎ塩ダレで焼かれた、香ばしい匂いが鼻を刺激する。

でも、あたしはそれを取って口に運べない。
お箸でお肉を串から引き抜くのも、もともとお肉が刺さっていた部分を通過させなければいけないと思うと手が動かない。

これは、シュウがかぶりついてた串。

胃の奥がぐうっと押されるみたいに苦しくなって、あたしはそれを皿ごとリョウスケに突き出した。

「あたし、今日は牛肉って気分じゃないんだよね。リョウスケにあげるっ」

わざとらしいくらい強引にリョウスケの前へ皿を置き、引っ込める手であたしは豚バラ串を取った。
大きく口を開けてむしゃぶりつき、口中を豚肉だらけにしてみる。
本当はトリ皮があればよかった。
けど、さっき最後の一本を食べてしまった。
代わりに豚肉でもいいから塩と胡椒、そして脂の甘みでいっぱいになりたかった。

頬張ったお肉を飲み下し、生グレープフルーツサワーで口の中を洗い流すと、ようやく胃の気持ち悪さがよくなった気がした。
こつんと膝頭を小突かれ彼を見ると、可笑しそうに口元が歪んでいた。
その口角に付いてぎらぎらと照明を反射する脂は舐め取りたいのに、シュウの口元は想像するだけでもまた胃が圧迫される。
口の中に生唾が湧いてきて、ごくりと喉を鳴らして飲み込んだ。

白く煙った視界に、トイレから戻るシュウの姿が入ってきた。
水泳で鍛えた厚い胸を狭めて、身体を小さくしながら混雑する店の中を歩く。
やさしい人だ。
けど、その顔は白くもやがかかっているみたいではっきり見えない。
いや、目が、頭が、見ようと思っていないから良く見えないんだ。

あれがあたしのカレシ。そう思った瞬間、強烈な違和感があたしを襲った。
店内のざわめきが遠くなり、明かりのトーンも一段暗くなったみたいに思える。
こみ上げる酸味の強い液体と、とめどなく口の中へ湧き出る生唾を必死に飲み込み、あたしは戻ってきたシュウと入れ違いにトイレへと立った。

今夜はサワーをジョッキで三杯。
たったそれしか飲んでいなかったのに、あたしは駆け込んだトイレで今夜食べたものを全部吐き出していた。

イト

豆電球のオレンジ色にぼやけた光が当たる天井を、あたしはベッドに転がって見つめていた。
明度の足りない灯りで見る天井は、白いはずなのに薄オレンジで、薄グレーで、ところどころ真っ黒で。
平面のはずなのに、ずっと見ていると凹凸があるようにも、底が無いほど深くも見えてくる。

あたしはベッドに仰向けになったまま、ベッドの端に丸まったタオルケットを足で手繰り寄せた。
手が届くところまで寄せ、それをおなかにかける。
出掛けに付けていったエアコンのドライ機能のおかげで、汗で湿っていたはずのシーツやタオルケットはさらりとしていた。
ノースリーブの肩に触れるシーツと、ショートパンツから出た太腿にかかるタオルケットの感触が心地よかった。

居酒屋で食べたものを全部吐いた後、あたしは用があるといって店を抜けた。
空っぽになった胃はまだ何かを吐き出したいみたいに収縮を繰り返し、帰り道に何度も胃液が喉を焼いたせいか喉からは血の味がするみたいだった。
まだ早い時間だったけどバスが来なくて、仕方無しに歩いたのが正解だったのか間違いだったのか分からない。
途中の公園で一休みし、水のみの蛇口を捻って飲んだ水は鉄の味がした。
喉からくる血の味と混ざって、まるで血を飲んでるみたいな気分になりかけてすぐにあたしはそれを吐き出した。

帰ってきたあたしは汗でべたべたになった身体と汚れた口周りをシャワーで流し、その辺にあった適当な服を着てベッドに転がった。
濡れた髪からシャンプーの匂いがする。
鼻から大きく息を吸い込み、甘いシャンプーの匂いで胸を膨らませてみる。
この匂いなら気持ち悪くならないし、タオルケットやシーツについたあたしの匂いでも大丈夫。

けど、シュウの枕とタオルケットはベッドから落ちたままだ。
引き上げて隣に並べる気には、どうしてもならなかった。
アレからはシュウの匂いがするはずだから。
自分のカレシの匂いがダメなんて、それってカノジョとして終わってる。

いや、もうそれ以前に終わってる。
だって自分のカレシの親友と、カレシのいない時間にこのベッドで――。

シュウよりずっと細くって、ずっと柔らかい彼の身体を思い出してあたしは細くため息をついた。
海のときや昨日とは違う。
今日は、あたしが誘った。

あたしの指が彼の手触りを求めて宙を彷徨った。
当然そこには彼の姿なんてなくって、オレンジ色に照らされたあたしの手はどさりとシーツの上に落ちるしかない。

「……別れちゃおっかな」

あたしは小さく声に出してみた。

同時に別れた後に二人がどうなるのかも考えてみるけど、それはとても現実味がない。
あたしとしか付き合ったことのないシュウが、あたしと別れたらどんなに悲しむだろうと思うと胸が痛む。
人が好いところだけが取り柄のような、温和なシュウのことだ。
きっとあたしには良いよ、気にするなよと言うだろう。
でもひょっとしたらずっと泣いちゃってるかもしれないし、もしかしたら学校に行けなくなるかもしれない。

そしてふと頭をよぎるのは、大学が始まったら毎週のように提出を求められるレポートのこと。
実験をして、データをまとめて、有意な結果から考察をする。
それはいつもシュウの手を借りていて、あたしは一人で全部をまとめきったことがないしできる自信もなかった。
オレンジ色に染まる天井に、膨大な数値とアルファベットの文字列を叩き出す解析機器の姿を思い浮かべてあたしは頭を振る。

匂いや諸々の好みが「合わない」ことより、そっちの不便がキツく感じた。

それに彼がどう言うか、とあたしは彼の猫っ毛の感触を覚えている指を豆電球の灯りにかざした。
光があたらない手の甲は黒々とした影になり、指の隙間や細く伸ばした爪がオレンジ色に透けている。
その黒とオレンジの境界線は曖昧で、でも滑らかなグラデーションを描くわけでもない。
隣り合っているのに交わらない。
重ねた指の隙間からこぼれる光に目を細めながら、あたしは彼の顔の輪郭をなぞるように手を広げた。

シュウの親友で、高校のときからあたしとも仲が良くて、シュウが居ても居なくてもふざけあったりできる仲で。
普段から割と優しくて、あたしに触れるときは激しくて。
声も、匂いも、感触も、あたしはそれら全部がたまらなく欲しくなって。

あたしの指が動きを止めた。
そう、欲しかった。
海に行ったときだって、誘われるまま飲み比べに応じたのは何か起きるきっかけが欲しかったからだ。

鼻の奥にオレンジジュースと焼酎の風味が蘇る。

月明かりの下で共有した吐息と汗。
夜が明けて明るい太陽の下で交わした共犯者のしるし。
それはずっと前から欲しかったものだったけど、カレシのトモダチという言葉を覆いかぶせて封をしていた。
けどあの夜、波の音とアルコールがあたしの脳を溶かして、ずっと前から頭の奥にあった固い封をあっけなく解いたんだ。

でも、あたしは彼の気持ちなんて聞いてない。
彼にあたしの気持ちも伝えてない。
ただ二人とも、欲しがるままに与え合っただけ。
そもそもこの欲しがる気持ちに、どんな言葉が当てはまるんだろう。

オレンジと黒の世界で、あたしはぎゅっと目を閉じた。

それから二時間も経たないうちに、玄関の外で物音がした。
がちゃりとドアが開き電気が点くと、ただいまと聞きなれたシュウの声が届く。

薄暗いオレンジ色の世界が一瞬にして白く変わり、あたしはベッドで横になりながら、おかえりとだけ返した。
けど玄関を上がる足音は一つじゃない。
あたしはばっと身体を起こし、ベッドから落ちたシュウのタオルケットを引き上げた。

「よう。寝てたのか」

足音の主は案の定というか、意外というか、やっぱり彼だった。
彼がその細い棒みたいな身体を屈めて部屋に入ってくるのを、あたしは呆然と眺めていた。
飲みに行く直前まで、仮にも親友のカノジョと抱き合っていた部屋へ、のこのことやってくるなんて一体どういうつもりなのか。
缶チューハイ入りのビニール袋を提げた、その飄々とした表情からは全く読めない。

「具合悪かったなら無理しないで言えば良かったのに」

冷蔵庫の隣の小さな戸棚からコップを三つ出して、シュウが心配そうに振り返った。
どうやら串焼き屋から宅飲みに変更したらしい。

「ちょっと顔色悪いみたいだけど、もうちょっと寝てるか？」

彼はテーブルに袋を置きながらあたしの額に手を当てる。
身体中に触れたそれがふわりと額に添えられると、夕方までの記憶が生々しく蘇った。
シュウはコップのほかに皿を出そうとこちらを見ていない。
それを分かっているのか、彼の手はあたしの額から滑らせるように頬、そして顎に触れる。

シュウが近くに居るのに。
理性ではシュウが振り返らないうちに離れなきゃと思ってるけど、身体がそれを拒む。
あたしが彼を見上げると、目が合った。
面白がっているのかと思った彼の表情は意外なほど浮かなくて、何か言いたげに唇が薄く開いている。
その微かに動いた唇に、あたしは引き寄せられるように身を乗り出した。

かちゃっと皿が鳴った。
あたしはその音にはっとして浮きかけた腰を、ベッドの上に引き戻す。
同時に彼の手もあたしから離れた。

そっと音の方へと視線を動かす。
戸棚から大皿が取り出せないシュウが、背中を丸めて小皿や他の食器と格闘している。
見られていないと分かっても、腋や額に汗がにじみ心臓はばくばくと音を立てていた。
おもむろに袋から缶を取り出す彼の顔からは、さっきの切なそうな表情が消えている。
動揺をごまかすように、ああそういえば、とあたしは口を開いてみる。

「リョウスケは？」

「過去問コピーするから今日はもうあがるって。飲める？　お茶にしとく？」

やっと食器を出せたシュウがあたしの顔色を伺いながら、部屋の中央にある小さなテーブルにコップを並べた。

「何買って来たの？」

「梅酒ソーダと、チューハイ各種」

「梅酒ソーダちょうだい」

「大丈夫か？」

何が？　と口を突いて出てきそうになり、あたしはただ黙って頷いた。

居酒屋でのあたしの様子がおかしかったことに気がつかなかったくせに。

ここ数日だって絶対あたし、態度がおかしかったはずなのに。

シュウの今更な彼氏面がやけに癪に障った。

本当にあたしのことになんて、もうろくに興味がないのかもしれない。

既にルーティンワークと化しているセックスからしてそうじゃないか。

あたしは鼻を鳴らして自分のコップに手を伸ばす。

テーブルに並んだ缶の中から、緑色のラベルがついたのを選んでプルタブを引いた。

ぱしゅっと景気のいい音がして、開け口から細かい泡が吹き出した。

泡がはじけていくにつれて、手に持った缶の側面がへこんでいくような気がする。

缶を持つ手に力をこめて、あたしはそのまま梅酒ソーダを口に流し込んだ。

ラベルには微炭酸と書いてあっても、喉を焼くような刺激には大差がない。
本当は炭酸はキライ。
でも飲まずにいられない。
痛みに顔をしかめながら缶を傾ける。
隣で彼が大丈夫かとか言ってるけど、大丈夫だろうと大丈夫じゃなかろうとあたしは飲みたかった。

冷たいはずの梅酒ソーダが空っぽの胃に入ると、鳩尾のあたりがカイロでも入れたみたいに熱くなってくる。
あたしはテーブルの上からもう一本、今度はグレープフルーツのチューハイを取った。

「おい、一気に飲むなよ。具合悪いんだろ？」

ポテチやスナック菓子を皿に空けたシュウが、眉をひそめてあたしに言う。
もののついでのような言い方に、更にムカついた。
あたしはわざとそれには答えず、黙って缶に口をつけた。

アト

コンビニのコピー機にはり付いてかれこれ二十分。
サークルの先輩から借りた過去問に、あたしなりの解答をくっつけた予想問題集を四人分コピーする。
冷房が効きまくった店内で、お店独自のＢＧＭが流れる中コピー機はひたすら働き続ける。
デジタルの残金表示が十円ずつ減っていくのを見ながら、あたしはノートのページをめくってはセットして印刷ボタンを押す動作を繰り返した。

宅飲みから一週間が過ぎ、今頃はシュウもリョウスケもそして彼も、それぞれが担当分の過去問に取り組んでいるはずだ。
さすがにこの時期、シュウも自分の部屋に帰ってる。
おかげで変にイラつくこともない。

ラッキーなのかそれとも誰かが気を遣ってくれたのか、あたしの担当はあたしの得意科目だけ。
過去問自体もノートとテキストを見れば大体答えがわかるものばかりだった。
早々に予想問題集を作ったあたしは、図書館の帰りにアイスを買うついでにそれを人数分コピーしようと思い立った。

でももうどっちが「ついで」か分からないくらい、あたしはコピー機の前にいる。

学校から歩いて相当汗ばんでいた背中はすっかり冷やされ、むき出しの二の腕には鳥肌が立ちそうだった。
残りのページ数を考えると、あと十分はここでこうしていなきゃい

けない。
暑さを紛らわすために買おうと思ったアイスはもう要らないな。
店の外でぎらぎらと太陽を照り返すアスファルトが恋しくなって、
あたしはコピー機に早く終われと念じてみた。

ようやく全部コピーが終わって刷り上った紙をバッグに詰めると、
あたしはそそくさと店を出た。
さすがに三十分もコピーをしていたら気まずい。
しばらくここへは来ないようにしよう、なんて思いながらあたしは
バッグを担ぐ。

店の外に出た瞬間、むっとするような湿気と熱せられたアスファルト
トの匂いが顔の周りにまとわりついた。
冷えた身体にはちょっとありがたかったけど、それを満喫するには
バッグが重すぎた。
ずしりと肩に食い込むトートバッグのもち手をずらすと、当たって
いた部分の皮膚がへこんで赤みを帯びている。
部屋まで持って帰るか、それとも各人に配るために歩くか。

あたしは後者を選んだ。

よいしょっとバッグを担ぎなおし、あたしは来た道を引き返す。
大学の正門近くにある背の高いマンションまで、なるべく日陰を選
んで歩いた。

でも、あいにくとマンションの住人は不在だった。
エントランスで呼び鈴を鳴らしたけど、そいつは降りてこなかった。
出席日数も成績もやばいヤツが、今頃どこへ行っているのやら。
留年確定かねーと一人笑いながら、あたしはリョウスケの分を取り
分けて郵便ポストへと突っ込んでおいた。

少し軽くなったバッグを担ぎなおし、あたしは次の目的地へと歩き始めた。
いや、むしろ最終目的地か。
下草の蒸れた匂いに何故かシュウの顔を思い出したけど、それは別にあたしを思いとどまらせるまでには到らない。

できるだけ歩く距離を減らすために構内をつっきると、そこかしこに植えられた大きな木からは盛大に蝉の声が響いていた。
日陰を歩いているとはいえ日なたと気温にそれほどの違いも無く、逆に忙しない蝉の声と照り返しの熱気が体感温度を上げているようだった。

いつの間にか冷え切っていた身体は温まり、額から顎に汗が伝う。
やっぱりアイスが食べたい。
でも引き返すなんてできなくて、あたしは木立で出来た日陰を歩いた。

裏門を抜け、アパート街を三区画も歩くと見えてきた。
青く塗装されたコンクリート造りの三階建てアパート。
一階部分の駐車スペースに彼の車を探す。
見慣れた水色の軽自動車があるのを確認すると、あたしはバッグを担ぎなおしてアパートの階段を登った。

三階まで登ると息が切れる。
噴き出した汗で背中や腿に衣服がはり付いて気持ち悪い。
首筋を伝う汗の量もハンパない。
あたしは荒い息を整えながら、三つ並んだうちの真ん中のドアの呼び鈴を鳴らした。

どたどたと中で足音がしたかと思うと、扉はすぐに開けられた。
ひょいっと顔を出した彼は、あたしを見ると目を丸くする。
あの夜以来、あたし達は顔を合わせていない。
彼の顎の下にちょっと伸びたヒゲが、会わない日数そのものみたいだった。

「どうした？」

「過去問。コピー終わったから持ってきた」

あたしはバッグからコピーした予想問題を覗かせる。

「いや、それもそうなんだけど、その汗」

あたしの答は彼の質問とは微妙にずれていたらしい。
苦笑いを浮かべてあたしは手の平で額の汗を拭った。

「コピーしたついでと思って歩いたら、やっぱ暑かったわ」

「どっから歩いてきたんだよ、馬鹿。とにかく入ってちょっと休んでけ」

呆れたように笑うと、彼はあたしを部屋へと招き入れる。
狭い玄関にはサンダルやスニーカーが散乱していたし、ワンルームの部屋へと続く廊下にもここ数日の不摂生の跡を思わせるカップ麺の容器がいくつか転がっていた。
いつもはきれい好きなのに、テスト前はさすがに気を遣う余裕もないみたい。
珍しい彼の様子に可笑しくなって、あたしはくすくす肩を揺らして笑った。

「なんだよ」

「散らかってるなあと思って」

「しょうがないだろ、テスト近いんだし。まさか誰か来ると思ってなかったし」

彼は笑いながら床に散らばったプリント類をまとめてテーブルに乗せる。

部屋に置かれた白い丸テーブルは、確か今年の春に雑貨屋さんで買ったやつだ。

シュウがバイトの日に、彼と映画観た帰りに買ったんだっけ。

あたしはそのテーブルの脇にバッグを下ろして、天板を指でなぞった。

埃一つついてこない。

当たり前か、使ってるんだから。

「あー、もう、片付けサボるんじゃなかった」

整理しきれないプリントを抱えて彼が一人ごちる。

とりあえずの置き場にも困ってるのか、どさどさと紺色のシーツがかかったベッドに放り投げ始めた。

あたしは散らかってるのなんて気にしないのに。

バッグから予想問題集を取り出して、テーブルに並べながらあたしは彼を見上げる。

鼻の頭に汗を浮かべた彼が、首を傾げた。

「来たら迷惑だった？」

「別に」

「じゃあいいじゃん、散らかってたってあたし気にならないし」

「俺が気にするの。だらしないみたいだから」

「別に誰も見てないのに」

「お前が見てるだろ」

それが嫌なの、と彼は顔を背けた。エアコンから流れ出る冷気で程ほどに冷やされている部屋の中で、思いもかけず彼の耳が赤く染まっている。

こんな彼は初めてだった。

きっと今、あたしの顔は弛んでる。

「あっついな」

彼はそう言うとエアコンのリモコンを取り上げた。

ぴっと一回押して設定温度を下げる。

指令を受けたエアコンが唸り声を上げた。

ちょっと埃っぽい匂いはするけど、あたしの頭を掠める強い冷風が火照った顔に心地よかった。

「もうできたの？」

ひとまず片づけを終え、彼がテーブルの上のプリントに手を伸ばす。

あたしは彼の分の残りもバッグから取り出して、プリントの中身に

ぶつぶつ言ってる彼に渡した。
生理学の過去問まとめをやってる最中、これが苦手な彼が分かりやすいようにと思って作ってたなんて内緒。
ずっと触れたかったなんていうのも、今日は内緒にしとくつもりだった。

けど、プリントを手渡すときに紙の下で指が触れ、あたし達はお互いに顔を見合わせる。

テスト前で一層長くなった茶色い前髪の奥で、彼の細い目があたしを見てる。
最後に会った夜はキスし損ねたんだっけ、なんて思ってたら、彼の指があたしの指全体を探るように触れ始めた。
ゆっくり、ゆっくり、指の付け根へと探り進む。
そしてその細い指はあたしの薬指で止まった。

彼の目が揺れる。
ぐるりと一周、彼の指があたしの薬指の付け根をめぐる。
そこにある硬い金属の感触を確かめるように。

一廻りして彼の長い爪がこつんと金属の輪を叩いたのと、あたしが手を引っ込めようとしたのと、どちらが先だっただろう。
支えを無くしたプリントの束が音を立ててテーブルへと落ちた。

「あ……」

「ご、ごめ……」

二人ともほぼ同時に口を開いて、そして床に散らばる紙に手を伸ばした。

無言でそれらをかき集めていると、あたしの前髪が揺れた。
目だけ動かしてあたしは彼を見る。
彼の目線はテーブルや床に散らばるプリントに注がれていて、あたしの視線には気が付かないんだろう。
鼻の頭に浮かんだ汗や開いた毛穴まで見えるほど近いのに。
ただ細く口をすぼめて吐き出されるため息に似た呼気に、あたしの前髪が揺れ続けた。

あたしは集めたプリントの下で、自分の右手の薬指にはめられた拘束に触れた。
もうどのくらいこれを付けてるんだろう。
すっかり肌の一部と変わらなくなってて、あたし自身拘束されていることを忘れていた。
重量感のある銀が三連、それにぐるぐると巻かれた指は証拠だ。

あたしがまだ、シュウのものであるということの。

「あの、さ」

「あのね」

二人でほとんど同時に口を開く。
お互いの声が思った以上に近くって、あたしは思わず顔を上げた。
さっきチラ見したときよりずっと彼の顔が近くて、伸びたひげの一本一本がはっきり見える。
彼の薄く開いた唇が、何か躊躇うように小さく動いた。

「……何？」

あたしは、彼の言いたいことが分かってるくせに分からないフリをする。
何故か夏休み前、学食でシュウと彼がごはんを食べているのを思い出した。
選ぶメニューがかなりの頻度で被ってたのも、シュウがコーラ派で彼がコーヒー派だったのも、食後に同じ漫画雑誌を広げていたのも。
でもそのどれも、シュウの姿が霞んでいた。

あの夜アルコールに蕩かされたあたしの脳は、ゆっくり固まっていったけど元の形には戻っていない。
溶けて流された部分は戻らない。
それに引き換え、あたしの心臓はどこまでふてぶてしいんだろう。

「……その指輪、いつまでしてるの？」

こんなに近くにいるのに、彼の声は掠れて小さくて。
あたしはそんな彼を黙って見上げた。

シロ

夜になって、あたしは彼に送ってもらってアパートへ帰ってきた。
じゃあと短い挨拶だけ交わし、彼を見送って振った手は軽かった。
部屋のドアを開けようと、小刻みに点滅するポーチの明かりの下で伸ばした右手に目が行く。
薬指の付け根に残る、うっすらと白い跡。

外したシルバーリングの重量は十三グラムちょい。
随分ボリュームがあると思っていたけど、実際に計ってみればそんなものだった。
十三グラム、一円玉十三枚、たったそれだけ。
なのに、それを外したあたしの手は羽が生えたみたいに軽かった。

彼は部屋にあった小さなキッチンスケールでその数字を見ると、小さく鼻を鳴らした。
尖らせた唇はへの字に曲がって、ふてくされてるんだか拗ねてるんだか、それとも含み笑いを堪えてるんだかさっぱりわからなかった。
けど何も無くなったあたしの薬指をその細長い爪先で撫でると、何回もそこへ唇を当てた。

くっくっとあたしの喉が鳴る。
くすぐったさを思い出して肩を竦めると、あたしはドアを開けて中に入った。
ほぼ一日締め切っていた部屋の中はまるでサウナだった。
日が落ちて暗くなったからといって、あったまった壁や床がすぐ冷めるわけでもなく、ほかほかしてる。
彼の部屋の冷房と車のエアコンは気持ちよかったのに、あたしの肌がじわりと汗をまとっていく。

「……あっつー」

誰に言うでもなく、いや、誰も居ないからこそあたしは呟いた。
玄関に並べたサンダルやスニーカーを除けて、履いていたのを脱ぎ捨てる。
顔にまとわり付く熱気がウザい。

早いとこエアコン入れて、シャワーを浴びてしまおう。
重いプリントの束が入ったトートバッグをベッドに放り、テレビの脇に転がっていたエアコンのリモコンを押した。
ぶおん、と古いエアコンが唸る。

シャワーを浴びにバスルームへと向かうと、あたしは干してある洗濯物をがばっと一纏めに抱え込んだ。
ハンガーが付いたままの状態で洗濯機の上に乗せ、その中から部屋着を漁る。
シュウが帰ってしまってからは、洗濯物はあたしのものだけ。
いろんな色のTシャツやタンクトップがあるけど、当たり前のようにあたしのサイズであたしのものばかり。
どうせもう夜だし、こんな時間からは誰も来ないだろうとあたしはタンクトップを一枚選んだ。

裏返して干してあるそれを、ハンガーから外してくるりと表返す。
鮮やかな緑色の、袖ぐりに黄色いパイピングがしてある一着。
胸のロゴが気に入ってたんだっけ、とあたしはそれを広げた。

でもそこにはあたしの気に入ってたロゴ以外のものが存在していた。
いや、あるべきものが抜けていると言ったほうがいいのかもしれない。

緑色の生地に濃いグレーで描かれていたはずのガールズブランドのロゴとエンブレム。
その全面に、米粒大から大豆大くらいの大きさの白点がぽつりぽつりと点在していた。

「何コレ、最悪っ……」

白い部分は糸が縦横に交差しているのが見え、完全に色抜けしている。
うちには無いはずの漂白剤を入れるわけもないのに、何でこんなことになったんだろう。
あたしは腕を伸ばしてタンクトップを広げたまま、最後にこれを着た日がいつだっけと記憶を辿る。

「……ああ、あれかぁ」

とすると、とあたしは洗濯物の山から一枚の服を引っ張り出した。
夏休みに入ってすぐに買った、白いチュニック。
裏返って縫い目の見える状態から、くるっとひっくり返して胸元の生地を観察する。
そこにうっすらと残っていたはずの茶色いしみは、輪郭も残さず消えていた。

「やったー、消えてるー……」

誰も聞いていない独り言。
もっとテンション上げても良かったんだけど、あたしの語尾は尻すぼみに小さくなった。
一目ぼれして買った服についたしみが取れたのに、それがあんまりうまく喜べない。

コットン素材のチュニックが、必要以上によれてシワシワだったからかもしれない。
彼に弁償しろとじゃれつく口実がなくなったからかもしれない。
皆で海に行った日に来ていたタンクトップの色抜けの方が、あたしにとってはショックだったのかもしれない。

良く分からない。

あたしは勢いよく首を横に振って、着ていたものを全部脱いだ。
バスルームで熱いお湯を頭からかぶり、いつもよりたっぷりのシャンプーとボディソープで全身を泡だらけにして洗いまくった。
本当は良くないんだろうけど、腕も脚もおなかもボディタオルでごしごしと力をこめて擦りまくる。
手の指も足の指も、今日はとんでもなく念入りに擦り続けた。

でもどんなに擦ってもあたしの肌は今以上に白くはならないし、指に残った跡も消えない。
しまいにはあたしの息が上がっちゃって、そこで仕方なくまた熱いお湯を被った。
床一面に白い泡が広がった。
体中に付いた泡が排水溝の細い溝に流れ落ちていって、消える。
それをじっと見て、最後の泡が消えてからあたしはゆっくりと身体を拭いた。

バスルームから出て緑のタンクトップを着ると、あたしはため息を吐いた。
おなかの部分にいくつもの白点が見え、とんでもなくテンションが下がる。
もうこれは外に着て行けない。

完全に部屋着に降格したそれの下に、パイル地のショートパンツを履いてあたしは冷蔵庫を開けた。

冷蔵庫のドアが開く音と玄関の鍵が回るのと、ほぼ同時だった。
手元とは違う方向からのがちゃりという音に、あたしははっと顔を上げて身を固くする。
ここの部屋の鍵を持っているのはあたしの他には、実家の親とシュウだけ。
つい一昨日電話したのだから、親が突然来ることなんてありえない。
ということは、そういうことだ。

「ああ、いたんだ」

ドアを開けてのっそり入ってきたのは、もちろんシュウだった。
ぼさぼさの髪に黒いTシャツ、使い古したジーンズに、そして雪駄。
……雪駄だ。
カラコロと乾いた音を立てて、シュウが雪駄を脱いで玄関に上がる。
そしてすうっと何も言わずにあたしの前を通り過ぎると、部屋へと入ってしまった。

何か変だった。
いつものシュウじゃない。
通り過ぎる前にちらっと見えた目がいつもと違った。
それにこうやってテスト前の夜に来るときは、絶対何か夜食用に買い込んでくるはずなのに手ぶらだなんて。

耳の近くで、心臓の音が聞こえた気がした。

シュウは黙って部屋まで入ると、立ったままぐるりと周りを見渡したみたいだった。

そしてベッドの方で顔が止まって、そこで動かなくなった。
五秒、十秒経っても動かない。
十五秒、二十秒経ってもシュウの顔がこっちを見ない。
耳の近くで聞こえた心臓の音が、今度はもっと近くで大きく鳴った。
一秒がものすごく長かった。
耳の近くで大きく成り続ける鼓動の音は、がつんがつんとあたしの脳に響く。
何回も何回も頭を揺さぶられて、視界が横にぶれていく。
じわり、とあたしの部屋が暗くなったように感じた。

「……あの」

あたしは沈黙に耐えかねてとうとう口を開いた。
すっかり乾いてしまった唇と喉からひねり出した声は掠れてて、残り物が奥歯に挟まる。
どうしたの？　と聞きたいのか。
何？　と聞いたほうがいいのか。
この先どんな言葉を選べばいいのか、無言の背中は教えてくれない。

「コピー」

突然、シュウの低い声がした。
たった単語一個なのに、それが口から出た途端ごとりと床に落ちたみたいに重たい声。
あたしの喉はきゅっと音を立てて詰まった。

「……昼過ぎにリョウスケから電話あってさ。コピー、配ってたんだろ？」

あたしに背中を向けながら、シュウはゆっくり話し出す。

「あそこにあるの、残り何人分なわけ？」

語尾が上がって疑問の形にはなってたけど、それはあたしの答を必要としていない。

顔をベッドの方へ向けてるシュウの表情は、部屋からの光が邪魔で全然分からなかった。

ただ、低い声と背中があたしを遠ざける。

「……どんなに遅くても夕方前には来るかなって、思ってたんだけどお前来ないし。ガッコからリョウスケんち寄ったら、ここ来る前に俺んちあるだろ？　どうして、来なかった？」

どうして来なかった？　が、どこに行っていた？　に聞こえた。

疲れてまっすぐ帰ったんだよ、と言えばいいのか。

コピーの束は三人分だよ、とでも言えばいいのか。

正解が分からない。

その前にあたしの詰まった喉は全然開かなくて、言葉が出ない。

バーベキューに行く相談を四人でしているときの風景が、シュウの白い背中に浮かんだ。

あ、とか、う、とか何とか音を出そうと口を開くけど、それは掠れて消えてしまう。

静かすぎる部屋はエアコンが吐き出す風の音と、ちょっと古い蛍光灯の鳴き声で満たされた。

それは耳鳴りにも似てる。
あたしはじわじわと湧いてくる生唾を飲み込んだ。

ゆらりとシュウの影が動いた。
ベッドの方を向いて微動だにしなかった背中と顔が、ゆっくりとこっちへ向き直る。
口の中いっぱいに、生暖かい液体が溢れてくるのを止められない。
あたしはまた生唾を飲んだ。

表情を無くしたシュウの顔は、のっぺりとして、そして土みたいな色になっていた。
口は半開きで、視線は一箇所に留まっていない。
ふらふらと視線を彷徨わせて、決してあたしの顔は見ようとしない。
それが一点で止まり、そんなに大きくないシュウの目が見開いた。

「……あ、あの、ね」

「それ」

やっとのことでひねり出したあたしの声は、シュウの重たい声に阻まれた。
ごつごつした指であたしを指差す。
いや、指差したのは「あたし」じゃない。
あたしの顔や身体の斜め下、行き場も無くぶら下がっている右手。
日焼けした肌に、白く浮き出た跡。

「……随分焼けたんだな」

外すことなんて無いと思ってた、とシュウが呟いた。

蒸れたから、日焼け止めでかゆくなったから、お風呂だから。
言い訳なんていくらでもあるはずなのに。
でもシュウは何かを確信しているんだと、何故か分かった。
その瞬間、冷たい氷のナイフが喉元に突きつけられたように、あたしは一歩も動けなくなった。

ウソ

別れたんだ、と言うと彼の顔が歪んだ。

そりゃそうだ。

シュウと彼は友達なんだから。

過去問整理が終わったと電話があって、久し振りにやって来た彼の部屋。

不意打ちした前回よりずっと整理整頓された部屋の真ん中にある、白い丸テーブルに着くなり切り出した。

思い切り口をへの字に曲げ、眉を寄せて神妙な表情を作ろうとはしてるけど、頬が不自然に上がって目の奥がきらりと光っている。

困って、喜んで、でも考えて。

そんな顔。

あたしはテーブルに出されたアイスコーヒーに手を伸ばした。

一杯入れられた氷のせいで思い切り冷たい。

グラスの表面が盛大に汗をかき、流れ落ちた水がテーブルに輪を描く。

あたしはグラスを持ち上げて、テーブルにできた輪に人差し指で切れ目を入れた。

「俺のことは？」

「……なんか、勘付いてたみたいだった」

「そっか。ごめんな、辛いことさせて」

彼は神妙な面持ちを崩さないまま、あたしの頭を撫でた。
あたしはううん、と首を振る。
指輪を外してくれと言ったのは彼。
あたしがそれに応えたんだから、遅かれ早かれこういう事態にはなる。

自分から言い出すか、バレてから自白するか。
あたしには後者の道しか残されてなかったけど。

「リョウスケとかさ、サークルの皆には俺から言うよ」

「そっちの説明のが大変そう」

「別に。リョウスケは怒るかもしれないけど、でも」

彼の細長い腕があたしの肩に絡んだ。
その力のなすがまま、あたしは彼の薄い胸へともたれかかる。
赤いTシャツ越しに聞こえる鼓動は少し速い。
見上げた顔は、さっきより晴れやかだ。

「シュウには悪いけど、やっと……」

そう呟く彼の唇へあたしは自分の唇を重ねる。

苦い。
苦すぎる。

コーヒーの香ばしいほろ苦さじゃない。
たとえて言うなら苦瓜とか、ピーマンとか。
噛んだ途端、口の中いっぱいに広がる逃げ場の無い苦さ。

舌の上でいくら転がしても薄まらない、そんな苦いキスを繰り返す。
つかえが取れたのか、彼の舌は性急にあたしの口をこじ開けた。
生暖かくて柔らかいものが口内に侵入し、あたしの舌を探すように舐る。
それに自分の舌を絡ませてそっと吸うと、彼は更に奥へと入ってきた。

合わせた唇の僅かな隙間から漏れる吐息が熱を帯びていく。
ワンルームのアパートの一室は、エアコンの風の音とくちゅくちゅと唾液を絡めあう音だけしかしない。
ひどく苦いキスも繰り返していれば、いつのまにか気にならなくなるだろう。
鼻から入る彼の匂いが、耳から聞こえる彼の吐息と声が、舌の感覚を麻痺させていく。

じっくり絡みあった口の中はとろけ、同じようにとろけたあたしの身体は芯まで熱い。
そうなってくると、エアコンの風の音だってさざ波の音に聞こえ始めるから不思議。
ただあの夜に聞いた波と違って、エアコンの音は単調なだけ。

でもいいや。
その分彼に集中できる。
さっきの苦さを完全に忘れたい。

いつまでたっても座ったままキスを続ける彼に、あたしは焦れた。
唾液にまみれた唇を離し、なおも吸い付こうとする彼を見上げる。
今までと違って、ちょっと切なそうな目で見下ろす彼の表情がたまらなくセクシーに見えた。

茶色い猫っ毛を指に絡ませ、あたしは彼の首筋に舌を這わせる。
少しずつ下の方へと動いて、浮き出た鎖骨を左から右へとゆっくり舐った。
びくりと彼の身体が反応し、頭の上で短く呻き声が聞こえた。

「……ね、しよ？」

あたしは彼の耳たぶに軽く噛み付きながら、言った。

それから暗くなるまで、あたしは彼とベッドの中にいた。
離れたのはトイレに行くときくらいで、あとはずっと身体の一部を触れ合わせたまま。

日が落ちて、ゆっくりと窓の外が暗くなっていく様を彼の髪の向こうに見た。
白っぽい青空が少しずつ黄みを帯びていき、やがて紅くなる。
そして燃えるような紅色に群青色が混じった空が覆いかぶさり、熱気が残る街を夜が包み込む。
エアコンで室温を調節された部屋で過ごすものすごく生々しいあたし達に比べ、それはなんだか別世界のことのようにきれいだった。

でも部屋が暗くなって、あたし達はようやく現実に返った。
前期テストが目前に迫っていたことを思い出し、どちらともなく身体を起こす。
絶え間の無い刺激に晒されたあたしの身体は、そこかしこがひりひりと痛んだ。
けどあたしはそれを顔に出さない。
この痛みは彼の気持ちで、彼のしるしで、あたしにとって嬉しいものだったから。

暗い部屋の中で、お互いに手探りで服を探し当てる。
あたしが最初に拾ったのは彼の下着で、彼が最初に拾ったのはあたしのブラ。
くすくす笑いながら、あたし達はそれを交換して身づくろいをした。
Tシャツを着るとき、自分の髪に触れるとそれはもうぼさぼさだった。
この分だと顔も相当だ。
いっそシャワーを借りて、このまま今夜泊まってしまおうかとも思った。

けど、だめだ。
あたしは今夜帰らなきゃ。

あたしより早く服を着た彼が、ベッドから立ち上がって部屋の明かりをつけた。
ぱっと点いた蛍光灯の明るさが目に痛い。
あたしは数回強く瞬きをして、まだベッド脇に放り捨てられているショートパンツを拾い上げた。
帰りたくないなと思うあたしがゆっくりと足を持ち上げ、早く帰らなきゃと思うあたしがショートパンツをすばやく引き上げる。

「帰る？」

カーテンを閉めた彼があたしを振り返った。
彼の目も迷ってるみたい。
けど、あたしは今夜帰らなきゃ。

あたしは小さく頷いて見せた。

結局少しでも長く二人で居たくて、あたしのアパート近くにある二十四時間営業のスーパーまで送ってもらった。
夜の九時も過ぎるとお惣菜コーナーなんかはもう何も残ってなくて、カップめんとパンとグラノーラをかごに放る。
そしてサイダーと、牛乳。
ちょっと重いけど部屋まで何百メートルもないし、とレジ袋を担ぐようにして歩いた。

こんなに重い荷物を持つのも久しぶり。
いや、過去問のコピーを運んだ時も相当重かったっけ。
ほんの数日前のことなのに、あたしは久しぶりだなんて思ってる。
それが可笑しくて、鼻から息が漏れた。

歩きなれたアパートへの道をゆっくり歩き、階段を登って鍵を開ける。
がちゃりと硬い音が誰もいない通路に響いた。
がらんとした通路とは反対に、壁にポストカードが貼ってあったり、サンダルやパンプスが並んでたり、雑然とした玄関は音が響きにくい。
後ろ手に回した鍵は、少し静かにかちゃりと鳴った。

「ただいまー」

「おかえりー」

薄明かりの点いた室内から、返事が上がった。
でもあたしの心臓は微塵も動きを速くしない。
あたしは重い荷物をキッチンのシンクに放り、そのまま部屋へと繋

がるドアを開ける。

「おかえり、楽しかった？」

部屋の真ん中には、テレビゲームのコントローラーを持ったシュウが笑顔で座っていた。

あたしがこくりと頷くと、シュウは満足そうに笑ってまたゲームをやり始めた。
テーブルの上にはやりかけの過去問プリントが、お菓子の袋と一緒にごちゃごちゃと広げられている。
床に座り込むシュウの膝の近くには、飲みかけのコーラのペットボトル。
空きっぱなしの蓋に、こぼさないでねと声をかけてあたしはクローゼットを開けた。

部屋はずっとエアコンで冷やされてたんだろう。
クローゼットの中の温度も、部屋とそれほど変わらない。
下着とパイル地のショートパンツ、そして部屋着にしたタンクトップを引き出しから出す。
白い斑点が視界を横切った。

あたしはそれを見なかったフリをして、シャワーを浴びにお風呂場へと向かう。
テーブルの上に広げられたプリントは、あたしの苦手な化学。
ほっと胸をなでおろしている自分がいることも、気がつかないフリをした。

少し熱めのお湯を頭からかぶり、身体に付けて連れてきた彼の名残も洗い流す。

でももったいないとは思わなくなった。
鼻が匂いを覚えてる。
指が髪や皮膚の柔らかさを覚えてる。
それに今日は――。
胸の周りや内腿の皮膚についた、紅いしみをあたしはなぞる。
着替えて部屋に戻ったあたしを、シュウはまた笑顔で迎えた。
ゲームのコントローラーは既にしまってあり、コーラを片手にプリントの残りを片付けていた。
「化学、毎年簡単そうだよ？　二年周期くらいで同じ問題が八割」
テーブルを覗き込んだあたしに、シュウは既に出来上がった予想問題の束を指差した。
「ほんと？　じゃあ問題と答覚えていったらなんとかなるかな」
「テスト通すだけならね。ゼミとかきついと思うけど」
「いいよ、あたし高林センセのゼミ選択しないから」
「吉岡先生のゼミなんて、毎年抽選だっていうじゃないか。抽選もれで化学のほうに回されることだってあるかもよ？」
「そうなったらあたし卒業できないじゃん」
だから勉強しとけよ、とシュウがまた笑った。
やだなあ、と言いながらあたしも笑う。
まるで何事もなかったみたいな、今まで通りのあたし達。

シュウが残りの問題を片付けてる間、あたしはそれを横目に半開きのお菓子の袋に手を突っ込んだ。
ぼりぼりと音を立てて食べていると、シュウがまた笑った。

「あれ？」

「ん？」

「それってさ、色抜けたの？」

おもむろにシュウがあたしのタンクトップの、胸やおなかの白い斑点を指差した。
あたしの胸がちくりと痛む。

うん、塩素が跳ねちゃって。

そう言えば良いだけだったのに、なんとなくあたしは頷くだけしかできなかった。
そういえば鎖骨のすぐ下にも紅いしみがあった、と今更あたしは手の平を首に沿わせる。
もう隠す必要もないのに。
あたしが白い斑点を指先でつついていると、視界が急に暗くなった。

なに、と続けようとしたあたしの唇は、シュウの厚みのある唇に塞がれた。
上唇も、下唇もじっくり舐められるままにされる。
時折あたしの舌が触れるシュウの唇は、さっきまで食べていたお菓子の味がした。

覆いかぶさられるように床に倒れこむと、ショートパンツの裾から

無遠慮にシュウのごつごつした指が入ってくる。
下着越しに触れられると、そこにあるはずの小さな傷がまたひりひりと痛んだ。

「……今日は、彼にどうされてきたの？」

耳元で囁くシュウの声は、聞いたことが無いくらい無邪気だった。
テーブルの端からはみ出したプリントが、天井の丸いランプシェードを半分隠していて、床に転がったあたしから見たらまるで半月みたい。
ニセモノの半月をひと睨みして、あたしは目を閉じた。

バツ

テストが終わった。
手ごたえはあり。
というか、ほとんどの科目が過去問とそのアレンジだったから。
苦手な化学系もシュウの予想問題のおかげで全部解答欄を埋められたし、他の科目だって「優」にはならなくても「良」は軽くクリアしてるはずだった。

歴代の先輩さまさま、過去問をまとめてくれた友達さまさま。
そしてシュウさまさまだ。
あの時勢いに任せて別れなくて正解だった。
さすがに八割方が過去問通りでも、その過去問が解けないんじゃテスト受けたって不可を食らうだけだ。

あたしは足取りも軽く待ち合わせしたホールへと向かった。
テストが終わり次第、どっか遊びに行こうって彼と約束していた。
お昼ごはんを一緒に食べて、午後はめいっぱい遊ぼう。

太陽はまだ真上にいて、ぎらぎらと地面を焼いている。
ちょっと遅くなるけど、海とかに遠出してもいいしドライブでもいい。
でも彼が疲れてるようなら、ＤＶＤでも借りてきてインドアでまったりっていうのも構わない。

彼の部屋で並んでテレビを見ているところを想像する。
でもな、とあたしは首を捻った。
二人っきりで部屋にいたら、きっとベッドに居る時間の方が長くなる。

それも悪くないけど、いやむしろ――。

カーテンを引いた薄暗い部屋で、お互いの呼吸する音や体液を共有ところを想像すると喉が鳴った。
指が、唇が、彼の身体がまとう皮膚が恋しい。
彼の柔らかい耳たぶに噛み付きたいし、尖った鎖骨や腰の骨をなぞりたい。

塩味に似た、ちりっとした刺激が舌先に蘇った。
その瞬間、口の中いっぱいに彼の味が広がる。
最後に彼にあったのはテストの前だから、もう五日も経ったってことか。
あたしの身体の芯の方がきゅうっと切なく締め付けられた。

そっか。
あたし、彼が欲しいんだ。

あたしはバッグから携帯電話を取り出した。
メールボックスを開いて、いつのものだか分からないシュウのメールを開いて返信を打つ。
今夜はたぶん遅くなる、いや、帰らないかもしれない。
帰るようならそのとき連絡する、と。

手短なメールを送信すると、あたしはその履歴を削除した。
そして携帯をバッグに放り込み、ホールへと走りだした。
普段だったら日陰を選んで歩いただろうに、照り返しが厳しい構内の舗装路をつっきる。
多少だったら日に焼けたっていい。
汗をかいたらシャワーで流せばいい。
八月も終わりに近い外の熱より、彼を欲しがるあたしの内側の熱を

持て余してる。

テストが終わった開放感からか、ホールには人が溢れてた。
併設された売店でお菓子やジュースを買い込んで、これからおしゃべりでもするんだろう。
二百席ほどあるホール奥の食事スペースはごった返し、そこからあぶれた人たちが入り口付近でうろうろしている。
こんなに混んでたら彼がどこにいるか良く分からない。
あたしは背伸びやジャンプを繰り返しながら、彼の姿を探した。

「あっ」

居た。
売店のすぐ近くに、頭一つ飛び出た茶色い髪を見つけた。
ぴょんぴょん跳ねてるおかげでちらりとしか見えないけど、たぶんあの猫っ毛は彼だ。
指に絡みつくような、あの柔らかい髪が好き。
あたしは人ごみをかきわけるように売店へと向かった。

「遅くなってごめ……」

やっとのことで彼のところへ着いたあたしは、出てきた言葉を飲み込んだ。
彼だった。
でもテスト明けとは思えないくらい、見たことの無いような険しい顔つきだった。
だって、その隣にはシュウが居たから。

あの夜みたいに、こめかみのすぐ脇で血管が脈打つ音が響いた。
ぱっと顔を伏せてはみたけど、あたしの声は届いているはず。

こわい、けど見たい、そんな欲求に負けたあたしはちらりと目を動かす。
もちろん彼はあたしに気がついていて、ものすごくばつの悪い表情になった。

あたしに背を向けていたシュウも、彼の表情の変化であたしに気がついたんだろう。
じゃあ、と短く告げると、するりとあたしに背を向けたまま、するりと人ごみの中に紛れていった。

何だろう。
何を話したんだろう。
あたしの頭はぐるぐる回る。
激しく脈打つこめかみが痛い。
ざわざわとしたホールの喧騒が遠のいていく。

シュウの顔を見とけばよかった。
あたしはもうとっくにどこかへ行ってしまったシュウの背中を捜す。
でもそんなの見つかるわけもなくて、あたしはおそるおそる彼を振り返った。

ちょっと俯いていた彼は、あたしと目が合うと少し寂しそうに笑った。
ううん、目を細めて口の端を歪めたその表情は、泣いているようにも見える。
何か声をかけようとしても、いつの間にかカラカラに乾いてしまった唇が上手く動かない。
あたしは張り付いた唇を無理やり剥がして、動揺がバレないよう舌で入念になめした。

「テスト、できた……？」

声は正直だった。
震えるまではしなかったけど、乾燥しきった口から出た言葉は掠れてた。
そして言いたいこともこうじゃない。
何を話していたのか、シュウが何か言っていたのか、彼だってあたしの聞きたいことは分かってるはずなのに。
本題とはまるで違う、ごまかしてるようにしか思えないあたしの言葉に、彼は今度こそ顔全体を歪めて言った。

「帰ろうか」

帰り道、水色の軽自動車の中はとんでもなく静かだった。
いつもは何か音楽がかけられているけど、今日はそれすらない。
タイヤと道路が擦れる音と、エンジンの低い音が車体全体を振るわせるだけ。

彼は黙ったまま普段と変わらない丁寧な運転をしてくれて、でもあたしは気が気じゃない。
何か話題を出すきっかけもない。
もちろんそんな雰囲気でもない。
時々ちらっと見た彼の横顔は、無表情で何を考えてるかも分からない。

でも、部屋に着くなり彼の態度が一変した。
玄関の扉を閉めたとほぼ同時に、あたしの視界が真っ暗になった。
ぎゅうっと背中に巻きついた腕の感触と、鼻いっぱいに広がる彼の匂い。
頬にナイロンのベルトがあたって痛いくらいの強さ。

抱きすくめられている、と思ったときからこめかみを刺激する脈が大人しくなった。

彼の胸に押し付けられている耳に、彼の鼓動が響いてる。
とくとくと音を立ててた。
その速さは、夏休み前に実験で使ったラットみたい。
広口のビンに入れる時、ラットを持ち上げたら指先に伝わったあれと同じ。

体重が五百グラムしかないラットと、その百倍以上の体重の彼が同じ。

ふと、生き物はみんな死ぬまでの拍動の数が同じくらいだなんて話を思い出した。
力いっぱい抱きしめてくる彼が、急に儚く、もろいものに思えてくる。
あたしは肩にかけたバッグを落とし、彼の背中へ腕を回した。

「……どうか、した？」

聞かなくたって本当は分かってる。
原因はシュウだ。
きっとあいつが何か言ったんだ。
昨夜会ったときは、上手くやれよなんて言ってたくせに。

あたしのおなかの奥が、ぎゅっと熱くなった。

「……が、お前を」

彼の声が震えてる。

けどすぐに、彼があたしの肩に押し付けた顔を横に振った。
ふわりと身体の締め付け感が和らぐ。
押し当てられていた彼の顔が起き上がり、少し赤くなった目があたしを見てた。

薄く開いた唇が、何か言いたげに動く。
ものすごく辛そうに震えるそれに、あたしは思わず自分の唇を寄せた。
あたしの唇も、彼の唇も、びっくりするくらいカサカサしてる。
唾液腺を叱りつけてやりたいくらい。

「お前のこと、頼むって」

嘘。
あたしはそう口を突いて出そうになって、唇を舐めようと貯めてた唾液に思わずむせた。
彼はあたしの言いたいことが分かったらしく、背中をさすってくれながら続けた。

「わざわざ冗談だろって思ったよ。それにさ」

「それに？」

「あいつのケータイの画像データとか、目の前で消された」

鼻歌歌いながらやられたよ、と彼の顔がまた歪んだ。
明かりの乏しい玄関の、薄暗がりの中でも彼の鼻が赤くなっていくのが分かる。
ついさっき見たシュウの背中を思い出し、あたしは背中が薄ら寒くなった。

「わざわざ、そんなことを……？」

「やっぱ、すげー恨まれてるよなぁ……」

自嘲気味、というよりやけくそ気味に言うと、彼はまたあたしの肩に顔を押し付けた。
背に回された腕に力が入る。
肩に、じわりと熱いものが触れた。

その熱があたしの中に入り込み、胸の奥に突き刺さる。
学食でごはんを食べてる彼とシュウ、リョウスケの馬鹿笑いが聞こえた気がした。
空耳なはずなのに、その笑い声はどんどん遠くなる。
声が完全に消えたとき、あたしは忘れていた、ううん気がつかないフリをしていたことを思い出した。

もうあれを見ることも、聞くこともないんだ。
あんなにいつもつるんでたのに。

あたしは、彼に帰る場所を捨てさせてしまった。
ううん、彼の居場所も、シュウやリョウスケの居場所も、ぐちゃぐちゃにしちゃった。

急に足元がぐらついた。
分かってたことなのに、あたしの胸は針金で縛られるみたいに痛む。
痛くて、痛くて、でもあたしは歯を食いしばった。

これは罰なのかな。
彼への罪悪感や、シュウへの、リョウスケへの罪悪感なのかもしれ

ない。

だって、あたしだけが居場所を捨ててない。
シュウが彼にあてつけるのだって、元はといえばあたしのせいだ。

「……けど、俺どうしてもお前とこうなりたかったんだ」

どうしても、と彼は繰り返した。
鼻声に近いそれを聞いて、あたしの胸はまた痛む。
あたしだけが帰る場所をそのままにしてちゃいけない。
あたしもそれを捨てて、彼ときちんと向き合わなきゃ。

歯を食いしばったまま、こみ上げる何かを堪えた。
それが肩を震わせ始めた彼にバレないよう、ぎゅっと彼の背に回した腕に力をこめる。
息が止まっちゃうんじゃないかと思うくらい、あたし達はお互いを強く抱きしめた。

密着する身体が汗ばんだけど、あたし達は離れない。
離れたくなかった。
けど、あたしは辛うじて動く顔を少しだけずらし、彼の耳元へと口を寄せた。

そして、一言だけ囁く。

「好き」

セミ

彼の舌に自分の舌を絡ませながら、もつれるようにベッドへ倒れこんだ。
彼の部屋へ来てから、ただずっと玄関で抱き合っていたあたし達は既に汗まみれ。
肌に張り付いた衣服を剥がし、皮膚を擦り合わせ、体液と匂いを共有する。

唇の端から伝う液体は、もうどっちのものかなんて分からない。
おなかや、太腿の内側を伝う液体がなんなのかも分からない。
どうだっていい。
ここにいるのはあたしと彼だけだから。
音を立ててそれをすすり合うだけ。

電気もつけない、エアコンも入れない、薄暗くて蒸し暑い部屋。
湿ったシーツの上であたしと彼の荒い息が絡まる。
柔らかい髪に指を通しあたしが彼の頭を抱くと、彼の唇があたしの胸を吸う。
彼の腰があたしの脚を割れば、あたしは彼の身体へ腕と脚を巻きつけた。

繋がってる最中、彼はずっとあたしの名前を呼んでた。
喉の奥で、口の中で、少しずつ声を大きくして。
名前を呼ばれる度に、あたしの奥の方は弱い電流が走るみたいに甘く痺れた。
返事をしたかったけど、あたしの口はすぐに塞がれて声を出せなかった。

だから、返事の代わりに何度も喉を鳴らした。
身体の奥で感じる彼を、力いっぱい抱きしめる。
彼の身体が離れたのが、いつなのかも分からない。
気がついたら、彼の腕がベッドの端に置いてあったエアコンのリモコンに伸びていた。

「あっつ……」

すぐ目の前で彼の声がした。
ぼうっとする視界のピントを合わせる。
顔の上に彼の顎と喉仏があるのが分かった。
カーテンの隙間から見える外は、もうすっかり暗くなっている。
オーディオ類のランプが部屋の隅で光っているのだけが、鮮明に見えた。

「今エアコンつけたから、ちょっと休みな」

すぐ涼しくなるよ、と彼の声にあくびが混じる。
あたしの上に覆いかぶさっていた影が、大きく伸びをするように離れた。

「何か掛けてないと、汗冷えて風邪ひくよ」

「ん……分かってる……」

よっぽど眠くなったんだろう。
語尾がはっきり聞き取れないほど、彼の声が小さくなる。
どさりとあたしの横に棒のように細い身体を倒れこませると、じきに規則正しい寝息が聞こえ始めた。

テスト明けだし仕方ないか。
あたしは手探りでタオルケットを見つけ、彼の背中にかけてやった。
明かりが無い中、目を凝らしてよーく見る彼の顔はちょっと安らかになってるみたいだった。

心細さと独占欲と、後悔と決心。
全てを吐き出したように眠る彼。
すぐ起きる気配は無い。

あたしはベッドを揺らさないように起き上がり、散らばった服を身につけた。
時々、ちょっと胃や子宮が引きつるような感じがする。
けど、それを気にしている場合じゃない。
急いで身支度を整えて、忍び足で玄関に向かう。

玄関に置きっぱなしにしてあったバッグを肩にかけ、あたしはそうっと外へ出た。
暗い室内とはうって変わって、共用スペースのポーチは明るい。
多すぎる蛍光灯の明るさに目がしみたけど、急いでバッグから携帯電話を取り出した。

時刻は八時半。
新着メールは、一件。
五時半くらいに来てるメールだった。

収納されているフォルダだけ見れば、中身を確認するまでもない。
いや、中身を読みたくなかった。
決心が鈍る。
シュウ専用のフォルダが点滅しているのだけ確認して、あたしはバ

ッグに携帯を放り込む。

あたしは自分のアパートへ向かって走り出した。

部屋が近くなると、あたしの心臓は激しく動き出した。

走ってるからってだけじゃない。

当たり前だ。

だって、これから別れ話をしにいくんだから。

夜だっていうのにアブラゼミの鳴き声が辺りに響く。

その濁音のせいか余計に暑くて喉が渇く気がした。

スーパーの角を曲がってアパートが見えると、あたしは駆け足をやめて歩き始めた。

こっちからはドアが並んでいるところしか見えなくて、窓の明かりは確認できない。

けど、あたしは確信しながら階段を登ってドアの前に立つ。

あたしは部屋でゲームのコントローラーを持つシュウの姿を思い浮かべた。

きっと間違いなく居るんだろう。

あたしが帰ろうが、帰るまいが、きっと。

そう思ったあたしは鍵を取り出さないままドアノブを握り、それを捻った。

がちゃりと音を立ててノブは回り、ドアが外側へ開く。

玄関からまっすぐ突き当たる部屋には、やっぱり電気がついていた。

ごはんを食べるための小さなテーブルを端に寄せて、テレビのまん前に陣取ったシュウがこちらを向く。

その手には、いつも通りにゲームのコントローラー。
エアコンが効いた室内の冷気が、音も無く足元に滑り落ちてくる。
寒い、と感じるのと、部屋のシュウと目が合ったのが同時だっただろうか。
むき出しのくるぶしを冷たい手に撫でられたみたいに、ぞわりと鳥肌がたった。

「おかえりー。早かったね」

部屋からシュウの声が上がる。
あたしはごくりと喉を鳴らし、ゆっくり靴を脱いだ。
足裏に触れたひんやりとした床は、ゴミのざらつきも無くきれいに掃除がされている。
シンクも、洗いかごも、あたしが出て行ったときには飲み残しのコップが散乱してたはずなのに、きれいに片付けられていた。

今朝までだったら、助かったとしか思わなかっただろう。
楽できた、と。
テストだってそうだった。
シュウのおかげで答が埋められた。
すごく助かった。

考えてみれば、いつもそう。
シュウと一緒にいると、なんでも助けてもらえたんだ。
今回だって、シュウが別れたことにしようって言ってくれて助かったと思ったんだった。

でも、「助かる」は「好き」じゃない。

あたしはゆっくりと部屋まで入ると、テレビの前であぐらを組んだシュウを見下ろした。
シュウはそんなあたしににっこりと笑いかけ、視線をテレビに戻す。緑色の草原と青い空が清々しい画面と、スピーカーから流れるのどかな音楽。
何頭ものウシが草を食んでいる。
知らないうちに、シュウの牧場は随分大きくなっていた。

「シュウ、あのね。ちょっと話が……」

「今日は楽しかった？　こんなに早く帰ってこないで、テストも終わったし、羽伸ばしてくればよかったのに」

重たい口調のあたしとは対照的に、シュウは何か楽しそうな話でも始めるみたいに口を開いた。
でも顔はテレビを向いたまま動かない。
上から見るシュウの表情は、額に被さった前髪のせいでよく見えなかったけど、あたしがじっと見ている間も下の方では厚みのある唇が動き続けていた。

「夕飯さ、帰ってこないと思ってたから適当にそうめん茹でちゃったよ。食ってきた？　時間早いからまだだった？　もう一回そうめん茹でようか。ああ、ストックあったかな。明日の朝飯の買い物はしといたんだけど」

「ねえ、シュウ、ちょっと話を」

「でも朝飯も俺の分だけだったしなあ。まあいいか、後で買い物行っとくよ」

「シュウ、待って、話聞いてってば」

「まったくお前らも、テストも終わって久しぶりのデートなんだから、もっと楽しんで来ればよかったのに。せっかく俺が一肌脱いだのに、夜までもたなかった？」

ようやく顔を上げたシュウは、にやりと口の端を持ち上げて笑った。

「ホールでさ、俺の顔見て気まずそうだったからわざわざケータイの画像消してやったんだ。俺はもう身を引くよって。喜んでたでしょ？　張り切ってなかった？」

ポケットから携帯電話を持ち上げ、顔の前でゆらゆら揺するシュウ。けらけらと声を上げて笑ってて、でも何を考えているか全く分からない。

目も笑ってるけど、あたしはなんだか薄ら寒くなってそこから動けない。

シュウは無邪気な笑顔で、立ったままのあたしの腰に手を伸ばした。

「ねえ、今日は何されてきたの？」

あたしを見上げる目がぎらりと光る。

「晴れてお前が自分のもんになったってことで、せいせいしてたでしょ？　その勢いで結構スゴイこともしてくれたんじゃない？　別れたって言っただけでキスマークとかいろいろ付けてくるくらいだから。ねえ、今日は何されて来たか教えてよ？」

いつもより明らかに饒舌なシュウは、にやけた口元をあたしの腿に近付けた。

細く伸ばした舌先がちろっと触れる。
舐められたと思った瞬間、全身が粟だった。

「……やっ！」

反射的にシュウの顔を払いのけようとした。
けどあたしの両腕は空を切り、代わりに両膝に抱き付かれて転ばされてしまった。
腰と、肩を打ち、痛みで声が詰まる程。
あたしが動きを止めたそこへ、シュウは馬乗りになってきた。

「ほら、言ってよ。同じことしてあげるし、もっと良くしてやるって。それで俺にも同じことしてよ」

耳たぶに息がかかる。近付いた顔から逃げたくて、あたしは身をよじった。

「やだっ！　放して！」

「なんで？　お前だって好きじゃん」

「な……」

違うと叫ぶ前に、あたしの唇はシュウのものに塞がれた。
ねっとりした生暖かい舌が唇を割り、流れ込んで来る唾液が気持ち悪い。
でも腰から上はシュウに押さえ付けられて逃げられない。
込み上げる吐き気に、あたしは足をばたつかせてもがいた。

「ほら、何して来たか教えなよ」

唇を離してもシュウの手はあたしをまさぐり続ける。
だんだんそれが下半身に及び、下着の中にもごつごつした指が入ってきた。

「やめてよ！　触んないで！」

「いいじゃん。しようよ。お前だってそのつもりで帰ってきただろ」

「やだってば！　あたしもうこんなことしたくないって言いに来たんだからっ！　別れたいの、マジメにっ、ちょっと話を聞いてってば！」

でもどんなに暴れようとしても身体を動かせない。
体重が二十キロ違うシュウは、あたしがいくら蹴飛ばしてもびくともしなかった。
それどころか抵抗すればするほど、シュウの指はどんどん動きをエスカレートさせていく。
力の差と、ずっとぎらぎらしてるシュウの目が怖い。

「ねえ、ここは？　お前の弱いとこ、教えてやったら？」

「や、だあ…・・・」

気持ち悪い、けど逃げられない。
抵抗を諦めかけたその時だった。

がちゃりとドアが鳴った。
はっとしてそっちを見たあたしの呼吸が止まる。
部屋の戸は開け放ったままだったから、玄関までまっすぐ見えた。

暗い玄関の外には、見覚えのある細長い棒のような人間のシルエット。

なんで。

時間が止まったみたいに、すべての音と色が遠ざかる。

そこに居たのは、呆然とした表情でドアノブを握る彼だった。

少し遠いけど分かる。

信じられないものを見たように、彼の両目は見開かれたままあたし達に向けられてた。

「なんだ、早かったな」

頭上でシュウの声がした。

ふわりと身体が軽くなり、下半身の異物感から開放され視界が開ける。

開け放した玄関から、セミの鳴き声がなだれ込んで来た。

でもあたしは助かったとは思えない。

だって、早かったなって、それは彼が来ることが分かっていたということだから。

こんな体勢、誤解されるに決まってる。

あたしは必死に口を開いた。

「た、たすけ……」

絞り出したあたしの声は掠れてた。

小さ過ぎて彼のところまで聞こえていなかったかもしれない。

その証拠に、彼は小刻みに首を横に振って後退りを始めた。

「電話鳴って、起きたらお前居なくて、シュウがここに来いって、それで、これかよ……」

「おもしろいもの見せるから、早く来いって言っただろ？　どう？　ひっかけられた気分は」

シュウは大声で笑い出した。
蛍光灯の白い明かりの下、その無邪気な笑い声が酷く耳に突き刺さる。
額に手のひらをあて、彼はまだ何かぶつぶつ言って首を振り続けて、そしてあたしと目が合った。
悲しそうにその顔が歪む。

「……お前も、俺を馬鹿にしてたのか？　別れたとか、嘘ついて」

「ち、ちがっ……」

シュウの高笑いがあたしの言葉を遮った。
でも、そうされるまでもなくあたしは口ごもっていただろう。
だって、少なくとも今朝まではあたし、シュウと完全に別れる気なんかなかったんだから。
眉を寄せてじっとあたしを見つめて来る彼と、視線を合わせられなくてあたしは俯くしかない。
信じてたのに、と彼が吐き捨てた。
ばたんと勢いよく玄関の扉が閉められ、荒々しい足音が遠ざかる。
あたしは彼を引き止められない。

部屋の中央でまだ高笑いを続けるシュウを見上げた。

「呼んだの？　あんたが」

自分が思うよりずっと、低い声って出せるんだ。
ただ、今まで出したことがないくらいの低音があたしの口から飛び出しても、シュウの顔色は変わらない。
ものすごく楽しそうに、笑いすぎて目尻にたまった涙を拭いながらあたしの前にしゃがみこむ。

「そうだよ。お前、一人で帰ってくるし」

「……約束が違うじゃない」

そうだ。
別れたことにして、あたし達の邪魔はしない程度に夜会おうって言い出したのはシュウじゃないか。
あたしは唇を噛んだ。
せっかくこの男と完全に切れて、彼とのことをまじめに考えようと思ったのに。

あたしはシュウを思い切りにらみ付けた。

でもそんなの、シュウは鼻でせせら笑った。

「そんな都合のいい約束、するわけないだろ？　フタマタして、二人の男を弄ぶような女だって分かって、あいつも俺に感謝するんじゃない？」

作戦成功、とつぶやくとシュウは立ち上がった。

ゲームのコントローラーもそのままに、あとは何も言わずに玄関のドアを開ける。
テレビの画面で白と黒のまだら模様をしたウシがあくびを始めた。

「じゃ、もうお望み通り別れてやるから、あとは勝手にどうぞ」

戸口でひらひらと手の平を振りシュウが姿を消した。
ドアを閉める手間さえ惜しむように、開け放したままでさっさと行ってしまう。
遠ざかる足音は軽快で、あたしはそれを聞きながらただ床にへたりこんでいた。

彼も、シュウも、もう居ない部屋に、ぽつんと。

吹き込む夜風に混じるセミの声が、いつの間にかツクツクホウシのものに変わっていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9918n/

ハ　イ　ト　ク

2011年11月20日04時06分発行